

埼玉会館 前川國男建築セミナー 第8回 講演記録

* 本文及び写真資料等の無断使用はご遠慮ください。

『埼玉の自然、くらし、文化に寄り添う 前川建築』

2021年10月10日 14時～16時

主催：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

協力：株式会社前川建築設計事務所

埼玉県立歴史と民俗の博物館

埼玉県立自然の博物館

第一部「県内の前川建築をめぐる」

池田伸子氏（県立歴史と民俗の博物館 学習支援担当 学芸主幹）

井上素子氏（県立自然の博物館 自然担当 主任学芸員）

第二部「埼玉県の3つの前川建築をとおして

～前川國男が求めた建築の地平を俯瞰する～

橋本功氏（株式会社前川建築設計事務所 代表取締役所長）

第三部「トーク・彩発見」

橋本功氏、池田伸子氏、井上素子氏

埼玉会館 彩発見 150

埼玉の自然、くらし、文化に寄り添う 前川建築

埼玉会館 前川國男建築セミナー 第8回

2021.10/10 (日) 14:00～(開場 13:30)

定員 300名 入場無料

埼玉会館 大ホール

お話し 橋本功 株式会社前川建築設計事務所 代表取締役所長

施設案内人 池田伸子 埼玉県立歴史と民俗の博物館 学習支援担当 学芸主幹
井上素子 埼玉県立自然の博物館 自然担当 主任学芸員

主催：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団 協力：埼玉県立歴史と民俗の博物館、埼玉県立自然の博物館

埼玉会館 前川國男建築セミナー 第8回

埼玉の自然、くらし、文化に寄り添う 前川建築

2021.10/10 (日) 14:00～(開場 13:30)

埼玉会館 大ホール 定員 300名 入場無料 (先着順・要事前申込)

施設案内人

池田伸子 (いけだのぶこ) 埼玉県立歴史と民俗の博物館 学習支援担当 学芸主幹
井上素子 (いのうえもとこ) 埼玉県立自然の博物館 自然担当 主任学芸員

第1部	県内の前川建築をめぐる	池田伸子氏 井上素子氏
第2部	埼玉県の3つの前川建築をとおして ～前川國男が求めた建築の地平を俯瞰する～	橋本功氏
第3部	トーク・彩発見	橋本功氏 池田伸子氏 井上素子氏

申込期間 8月10日(火)から 当定員に達した時点で締め切らせていただきます。

申込方法 下記①～⑤を明記のうえ、メール・申込フォーム・はがきのいずれかの方法でお申込みください。
①氏名(漢字) ②氏名(フリガナ) ③電話番号 ④郵便番号 ⑤住所 ⑥メールアドレス (お持ちの方)

申込先 <メール> info-kakano@aaf.or.jp 「埼玉会館・彩発見」担当 小澤 宛
<申込みフォーム> 右のQRコードからご利用ください。
<はがき宛先> 〒330-8518 さいたま市浦和区高砂 3-1-4
「埼玉会館・彩発見」担当 小澤 宛

アクセス

JR浦和駅(西口)から徒歩5分
駐車場の台数に限りがありますので、公共交通機関をご利用ください。

お申し込みの際は、必ずお読みください。
・30名以上の集客や、催し物などの催しのある方、および集客が数回続いている方や、高層ビル(高層、超・超高層)の催しのある方、大人数(催し物)や集客する(催し物)がある方、その他、催し物や集客がある方。
・過去2週間以内に感染者から入室した方、入室後の観察期間が必要とされている国・地域への訪問者の方、発熱がある方、発熱中の方は、医師の判断や関係機関の情報を確認の上、慎重なお申し込みをお願いします。
・入場の際は、検温確認にご協力ください。ご入室までお時間がかかる場合がございますので、予めご了承ください。(30名以上の集客があった場合はご入室をお断りさせていただきます。)*マスを準備されていない方はご入室いただけません。会場内では無着マスの着用をお願いいたします。
・ご入室の準備、手洗いや、「検温チェック」にご協力ください。*会場内、ロビー等の数はお断りいたします。
*受付は、検温、アルコール消毒は朝の7時から19時まで、閉会後はお断りいたします。

問合せ「埼玉会館・彩発見」担当 小澤 ☎048-829-2471 (休館日を除く10時～19時)

第1部 「県内の前川建築をめぐる」

埼玉県立歴史と民俗の博物館

池田 伸子（埼玉県立歴史と民俗の博物館 学芸主幹）

平成8年に埼玉県の学芸員として採用される。

埼玉県立博物館、近代美術館等を経て、現在、埼玉県立歴史と民俗の博物館に勤務。古美術分野を担当する。企画・担当した主な展覧会は平成15年度特別展「平林寺」、平成16年度企画展「年中行事絵巻」、平成24年度企画展「にはほん美術夏期学校」、平成26年度企画展「氷川神社と大宮公園」など。現在は教育普及や博学連携を担う学習支援担当のグループリーダーをつとめる。

大宮公園内遺跡の中にある歴史と民俗の博物館

埼玉県立歴史と民俗の博物館で学芸員をしております池田と申します。これからご紹介いたします埼玉県立歴史と民俗の博物館は、昭和46年、1971年、今からちょうど50年前に開館した博物館です。今年が開館50周年の年となります。

博物館がある場所は、桜で有名な大宮公園の北西の位置になります。大宮公園の南側には氷川神社があり、そこから歩いて10分ほどの距離になります。大宮駅から公園の中を歩いてくるものいいですし、最寄り駅の東武アーバンパークライン大宮公園駅からは徒歩5分ほどのところとなります。

博物館の正門からのアプローチはこのようなになっておりまして、門を入れて右手の奥のほうに入り口があります。地面は規則的な網代模様にタイルが敷き詰められ、このタイルの模様は博物館の内部の床にもそのまま続いていて、外の空間と内部との一体感が感じられる造りとなっています。

ます。

実は博物館の敷地は、縄文時代と弥生時代の遺跡の中にありまして、この辺りは県指定史跡、大宮公園内遺跡と呼ばれています。弥

生時代の終わり頃、3世紀ぐらいの住居跡に住居を復元した展示があります。復元住居の後ろに方形周溝墓がありまして、ここから出土した土器などが常設展示室に展示されています。

博物館に入りますと、広いエントランスロビーがあります。とても開放的な空間で、奥に見える壁の向こう側が常設展示室、それから手前が地下から吹き抜けの空間になっているんですが、そこも展



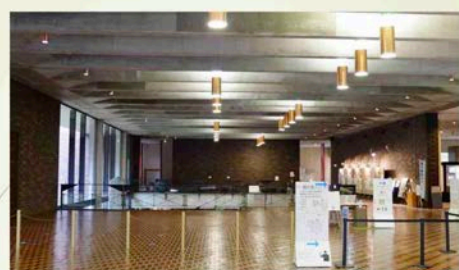
正門から見た入口

- ・2色のタイルを網代に組む。
- ・この規則的な文様は建物内にも続いている。



博物館は遺跡の中に建つ

- ・博物館周辺は「県指定史跡 大宮公園内遺跡」。
- ・縄文・弥生時代の遺跡。
- ・現在も遺構の一部が保存されている。



エントランスから見た常設展示室
エントランスロビーから常設展示室の3か所の入口が見通せる。

示室の一部となっています。

美術を含む総合博物館から人文系・歴史系の総合博物館に至る

博物館設立の具体的な計画は、昭和34年の博物館設置の請願が県議会で認められたことに始まっています。具体的な建設の構想や設計は昭和43年から行われ、昭和46年に開館しました。今は「歴史と民俗の博物館」という名前ですが、開館当初は「埼玉県立博物館」という名前です。もしかしたら皆様にはこの名前の方が馴染みがあるかもしれません。建物は50年前に建てられ、その後内部の改修などはありませんでしたが、基本的な構造や外観はそのままで現在に至ります。

しかし博物館の組織やその役割は時代とともに少し変遷がありまして、50年前は歴史系や美術系を含めた総合博物館として発足しました。当時、地方自治体が設立した博物館施設はまだ少なく、ひとつの博物館でいろいろな分野の展示や研究を担っていました。昭和57年に北浦和に県立近代美術館が出来たのに伴い、近代美術部門はそちらに移りました。その時に内部の改修も行い、昭和58年に歴史系総合博物館となり、考古・歴史、近代以前の美術を扱う博物館となっています。組織的には、平成18年に埼玉県立の博物館施設の再編整備計画により、岩槻にありました埼玉県立民俗文化センターと埼玉県立博物館がひとつの組織になりました。

民俗文化センターが担っていた民俗芸能や民俗工芸の展示や調査研究の役割も統合し、博物館の名称も「歴史と民俗の博物館」となり、人文系・歴史系の総合博物館として活動しております。常設展示のテーマは「埼玉における人々の暮らしと文化」となっています。

この写真は、建設中の埼玉県立博物館です。開館直前の博物館と思われませんが、今と比べて驚くのは樹木がまだとても小さく、50年経った今では非常に大きくなって、森の中にいるような感じになっていることです。

この50年の間に開催した展覧会は、令和2年度までで実に176回、今年度終了時には180回の展覧会をやることとなります。今、50周年を振り返る記念行事などをちょうど開催しております（註：2021年9月28日～12月19日）。昨日から、それを記念した特別展「埼玉考古50選」が始まりました（註：2021年10月9日～11月23日）。是非、展覧会期間中にご来館いただければと思います。

博物館内は常設展示室が10室ありまして、その他に展覧会を開催する特別展示室、様々な体験活動ができ

沿革など

- ・昭和34年（1959） 埼玉県立博物館設置の請願を県議会で採択。
- ・昭和43年（1968） 建設基本構想を決定。設計を前川國男建築設計事務所へ委託。
- ・昭和46年（1971） 開館。埼玉誕生100年の記念事業。
- ・昭和58年（1983） 新装開館（近代美術部門が近代美術館へ）
- ・平成10年（1998） 公共建築百選に選定される。
- ・平成18年（2006） 県立民俗文化センターと統合、埼玉県立歴史と民俗の博物館となる。
- ・平成19年（2007） 体験学習施設「ゆめ・体験ひろば」開設。
- ・平成22～23年（2010～2011） 大規模改修工事



建設中の埼玉県立博物館



開館直前の博物館



常設展示室1
歴史展示室 旧石器～弥生時代



常設展示室2
歴史展示室 古墳時代



常設展示室4
美術展示室



常設展示室5
歴史展示室 室町～戦国時代



常設展示室6
歴史展示室 板碑



常設展示室7
歴史展示室 江戸時代



常設展示室9
歴史展示室 明治時代～現代



常設展示室10
民俗展示室

る「ゆめ・体験ひろば」、ミュージアムショップがある休憩コーナーや講堂などから構成されています。

ここから少し、常設展示をご紹介します。常設展示室を見ると、大体その博物館がどういう役割を担っているかがわかるかと思えます。

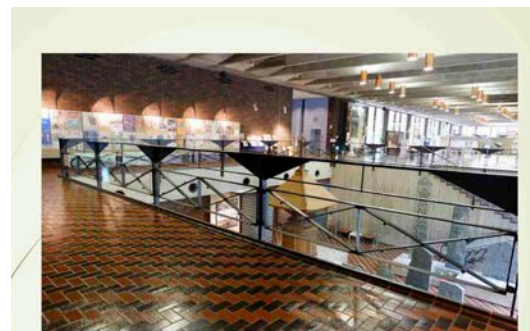
人文系・歴史系の総合博物館ということで、全部で10室あるうち8室が考古・歴史の展示室、ひとつが美術展示室、ひとつが民俗展示室という構成になっています。これが1室です。ここが2室、4室は美術展示室です。こちらが5室。この吹き抜けのホールが6室と呼ばれるんですが、ちょっと特殊な部屋でして、埼玉県に数多く分布する板碑（卒塔婆）の複製を展示する部屋となっています。これが7室、ここからが地下の展示室になりまして、江戸時代の展示室です。歴史展示の最後は明治時代から現代ということで、平成の時代までを扱っています。最後の10室目が民俗展示室で、博物館が平成18年に民俗文化センターと統合した時にできた新しい展示室になります。

大きな開放的な窓から見る庭は、まるで絵画のよう

本日は建築のお話なので、博物館内部の建築の紹介にいきたいと思います。詳細はこの後、前川建築設計事務所の橋本所長さまからお話いただくことと思えますので、今日は私の主観で、博物館で私が気に入っているところを主にご紹介していきたいと思えます。

これは常設展示室の中ですけれども、吹き抜けの周囲に巡らされた手すりですね。当館の手すりは大体このようなデザインで統一されているんですけれども、鉄で非常に開放感があってリズムカルなデザインだと思っています。ここの三角の部分「トンビ」と呼ばれているということを、私は長いこと知らなかったんですけれども、この三角形が非常に特徴で、皆様が訪れて目にする展示室だけではなく、職員がいる事務棟のベランダなどにも採用されています。

これが常設展示室の天井になりますが、このように吊り下げ形のライトがあります。

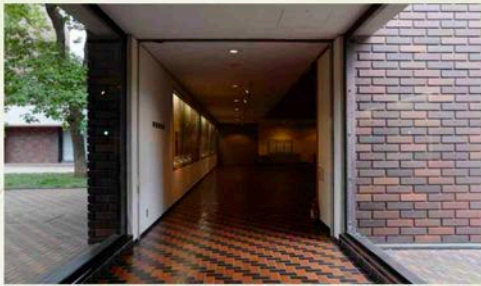


常設展示室 手すり
「トンビ」

この形は事務棟のベランダなどにも使われている。



常設展示室 天井とライト
ジョイントスラブ天井



季節展示室へ向かう通路
左右にガラス窓。外との一体感。

この奥の閉まっている扉が、特別展示室と言って展覧会をする部屋になります。常設展示室とこの特別展示室をつなぐちょっとした廊下のようなところが、私の気に入っている場所です。左右にこのように大きく窓がありまして、非常に開放感がある一角となっています。外のタイルとこのタイルが同じように連続したタイルでできているので、外との一体感をとても感じられる場所になっています。

この場所からちょっと奥へ行った特別展示室の手前に、季節展示室というのがあります。このように庭に竹林があるんですね。時々ここでベンチに座って長い時間を過ごすお客様、この場所をとても気に入ってくださるお客様もいらっしゃいます。このようにしばしば大きな開放的な窓があって、そこが絵のように見える場所が多くあるのが、この博物館の特徴のひとつです。



季節展示室
外に竹林。



博物館のタイル（壁面・外）

椅子やテーブル、カーテンから壁の色まで前川色が満載

ちょっと細部を見ていきます。博物館の外の壁面の特徴あるタイルですが、明るい茶と濃い茶の2色で、微妙に濃淡があって、それが味わいになっています。

これが博物館の椅子、ベンチです。こちらも前川設計事務所さんでデザインしていただいたものです。

つまり、50年前からあります。黒と白の2色に、クッションは茶色で統一されています。この椅子は非常にシンプルなんですけれども、クッションを外すとテーブルになり、載せれば椅子になるという便利なものでして、現在でもその場に合わせてベンチになったりテーブルになったり、あるいは通路を仕切る仕切りになったりと大活躍しています。素材はFRPと呼ばれる繊維強化プラスチックですが、こういったものは劣化するんじゃないかなと思っていたら非常に頑丈で、現在でもほとんど壊れずに使われています。



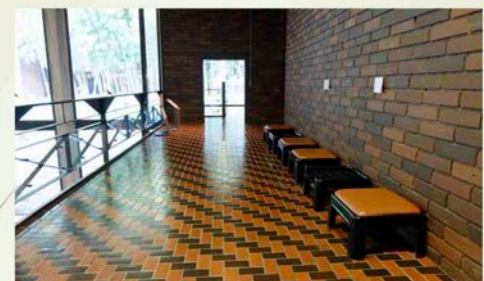
椅子
白と黒の2色ある。クッションは茶。レンガの色とよく合う。



講堂前ロビーの仕切り

同じ椅子ですね。これは黒で、クッションを取ったものがここにあるかと思いますが、このようにサイドテーブルのような感じでも使われています。

こちらはちょっと展示室から離れて、地下の階段を降りていったところに講堂があるんですが、前川建築をお好きな方はこのカーテンは見覚えがあ



椅子
椅子のクッションを取ればテーブルにもなる。

るかもしれません。私も昔、採用されて博物館内を見た時に「あ、東京文化会館と同じだ」と思いました。ちょっと逆光で見えにくいんですが、金属板を鎖で繋げたカーテンになっていまして、これもとても私が気に入っている場所です。奥に背付きの椅子がありますが、このタイプの椅子もありまして、さっきの4つ足の椅子をテーブルとして使い、背付きの椅子も所々に配置されています。

常設展示室が1階と地下の階にあるんですが、そこをつなぐ階段がこちらになります。この左右の壁ですが、私も前川建築に詳しくなかったころは、なぜここはこんな鮮やかな赤に塗られているんだろうと不思議に思っていたんです。それは、非常に深い考えがあっ

てのことということで、歴史展示って割と茶色く暗い展示が多いんですけども、そこからいきなりびっくりするような鮮やかな赤が現れて次の展示室に向かうというふうになっています。この踊り場から竹林がちょっと見えたりして、ここも素敵な場所です。

こちらが講堂前のロビーになります。これも鮮やかな赤い壁ですね。

こちらが本当にちょっとしたところなんですけど、特別展示室入口、今ここは入口としては使ってないんですが、その取手です。これは、合板を丸みをつけて成形したのかなと思われるんですが、ちょっと特徴的な模様をしています。

こちらはエントランスロビーから中庭に出る扉の取手です。このように丸みのついた取手で、埼玉会館の取手は逆に真ん中が凹むような形で全く逆の形をしているのが面白いと思いました。

今度はバックヤードですね。これが職員が使う会議室です。この机と椅子も前川デザインのものになっています。椅子は、木の枠に布張りです。

階段の踊り場にある窓です。縦長の窓の向こう側に、実は竹林が見えています。この右側の小さな窓からは、公園の道が見えて、これも本当に絵画を切り取ったような可愛い窓になっています。

これは学芸事務室前の廊下の窓なんですが、東側と西側の窓です。これらは同時に見ることができないんですが、実はこちらに見えているのが松で、こちらに見えているのが竹というふうに、松竹がちゃんと配されています。これに気づいたのはだいぶ後なんです

が、気づいてからはとても私のお気に入りの景色になっています。



常設展示室の階段
鮮やかな赤い壁。



講堂前ロビー
鮮やかな赤い壁。



特別展示室入口の取手
合板を丸みをつけて成形し、年輪のような模様が出る。



会議室
開館当初から使われている椅子、机。



中庭へ出る扉の取手
中央がふくらむ。



事務棟 階段踊り場の窓



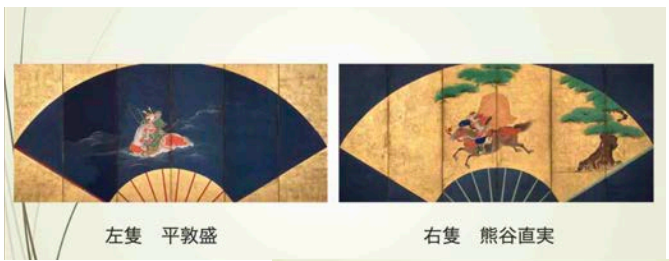
3階 学芸事務室前の廊下
東西の窓



「太平記絵巻」巻第二
埼玉県指定文化財 5巻 江戸時代



「一の谷合戦図屏風」海北友雪筆
右隻（熊谷直実）
埼玉県指定文化財 六曲一双 紙本着色 江戸時代



左隻 平敦盛

右隻 熊谷直実



「鯉亀図」葛飾北斎筆
埼玉県指定文化財 一編 紙本着色淡彩 江戸時代

旧埼玉会館の渋沢栄一の書による銘板と曰く付きの女神像

博物館の所蔵資料を簡単にご紹介いたします。夏に展覧会もやりました「太平記絵巻」は、江戸時代初期の絵巻です。

「一の谷合戦図屏風」は扇の構図が特徴的な屏風です。

これは、葛飾北斎の肉筆の鯉亀図というものです。

こちらが、ゲームとコラボしてキャラクターにもなりました、ニックネームを謙信景光という国宝の短刀です。こちらもご存知の方がいらっしゃるかもしれません。

最後に、こちらの埼玉会館と関わりのある資料をご紹介します。今の埼玉会館ができる前の、大正15年にできた旧埼玉会館の銘板です。正面の玄関の上の方に掲げられていた銅製の立派な銘板なんですけれども、これも今、博物館の収蔵資料となっています。この字を揮毫したのが、あの渋沢栄一で、渋沢栄一は旧埼玉会館の設立に非常に貢献した人なんです。

もうひとつ、これは博物館の中庭にある女神の像です。これも旧埼玉会館の塔の上に設置されていたそうなんです、当時、女性の裸体像というものを堂々と上に掲げるといのはいかがなものかと、非常に問題視されて結局撤去されてしまったという作品です。その後、紆余曲折がありまして、最終的に大宮公園内にありました料亭の清水園という所に置かれていたのを博物館

にご寄贈いただいて、現在、中庭に設置されています。

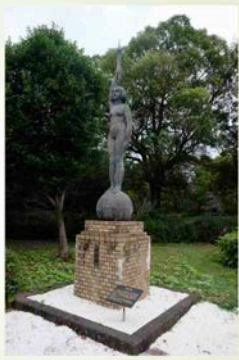
以上、博物館のご紹介を簡単にさせていただきました。私自身は博物館に勤務して25年ほどになります。勤めはじめた当時は、昭和の非常にしっかりしたつくりの博物館だなという印象があったんですが、それが全く古びずに現在も同じような佇まいであるというのは、つい当たり前のように思ってしまうんですが、非常に稀なことではないかと最近はお考えしております。

10年ほど前に、私よりずっと若い後輩の学芸員が、「前川の建築した博物館で勤務できるなんて本当に嬉しい」と言ったことがありまして、そういう考え方をする学芸員が出てきたのだと、改めて気づかされるようなこともありました。これからもこの博物館で働けることを幸せに思い、勤めていきたいと思っております。どうもありがとうございました。



短刀 銘備州長船住景光
国宝 1口 鎌倉時代（元亨3年）

女神の像
埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵
大正15年（1926） ブロンズ
旧埼玉会館時計塔の上に設置されたが、会館にふさわしくないとの理由で撤去された。
埼玉会館から撤去
→県会議員 加藤睦之介
→清水園（大宮）
→埼玉県立博物館
*清水常夫氏が寄贈
昭和52年（1977年）



旧埼玉会館銘板 埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵
きゅうさいたまいかんめいばん 大正15年 銅製

旧埼玉会館の正面玄関に掲げられた。渋沢栄一が揮毫。

埼玉県立自然の博物館

井上 素子（埼玉県立自然の博物館 主任学芸員）

平成10年埼玉県学芸員として採用される。埼玉県立博物館（現・歴史と民俗の博物館）学芸員、さいたま川の博物館学芸員（現・埼玉県立川の博物館）を経て現職。専門は自然地理学。「人と自然の関わり」を探る自然地理学の特性を生かし、自然災害や地質資源の利用など、自然科学と人文科学を総合的に捉える事業展開を心掛けている。最近担当した主な展示は、平成29年度特別展「秩父鉱山」、令和元年度企画展「地図と模型で見る埼玉の大地」など。



地球の岩盤上にある長瀬の「自然の博物館」

埼玉県立自然の博物館の学芸員をしております、井上と申します。よろしくお願ひいたします。私の方からは、長瀬町にあります自然の博物館についての魅力をご紹介したいと思います。自然の博物館ですが、池田さんの方からご紹介がありました歴史と民俗の博物館のちょうど10年後、1981年にできた博物館です。

こちらの、空から撮った博物館を見ていただきたいと思います。これは私が県警へりに乗せていただいて、酔いながら一生懸命撮った写真なんですが、博物館はとても素晴らしい所にあります。目の前に荒川が流れておりまして、ここはライン下りが通るところです。ここが舟が急流を下る一番の見せ場のところで、ここが観光地で一番有名な岩畳になります。

当館は秩父鉄道沿線にありまして、岩畳の最寄り駅が長瀬駅。そこからひと駅隣の上長瀬駅から徒歩5分です。秩父鉄道で熊谷から電車に来て博物館をご覧になり、それから岩畳もついでに楽しめるという、まさに自然の中にある自然の博物館です。

川床に見えているのが、長瀬を作っている結晶片岩と言われる岩です。皆さん、この岩を「綺麗だな」とか「岩畳って岩が出てるな」というふうになんか何気なくご覧になっていると思うんですが、実はこの岩は、日本列島の土台となっている岩なんです。これを関東平野で見ようと思うと、地下深く、なんと3km以上掘らないと出てこないんですね。私が住んでる深谷だと5km掘ってもまだ到達しないんです。岩槻で特殊な地震の観察用のボーリングを掘ってやっと3.5km下から出てきたという、そういう岩になります。それだけこの長瀬と関東平野は全く違う場所にあります。長瀬はこの岩盤の上に直接立っているというとても力強い場所なんです。博物館のある場所は河岸段丘ですので、もちろん昔は荒川が流れていたところなんです。数メートル掘ると岩盤になる、そういう場所です。

この10月30日から始まる「自然の博物館 100年の軌跡（注：2021年10月30日～2022年2月27日）」という展示を準備していますが、その中で、自然史博物館、と当時は言って



おりましたが、その設立について、橋本所長に展示図録にもご寄稿を頂きました。この自然の博物館の設計担当は橋本所長が手掛けられたそうです。設立する時に初めて長瀬に来て、ちょうど秋、この写真のように紅葉が深まる時期で、この土地の力強さというものを感じられて、その上に立つ木々の生命力、そういったものを生かした設計をしようと思っただけだと聞きまして、大変嬉しく思っております。

自然を知るための博物館

この自然の博物館は、自然と一体になった展示をしています。博物館の中の展示品もちろん貴重ですが、「自然を理解していただきたい。そのための展示をしている」という側面があり、外の岩畳の景色、それからそこにある紅葉、こういったものを感じながら生物を観察していただいて、博物館に来て自然をご理解いただく。そういうようなコンセプトの博物館になっています。

この博物館なんですが、実は100年の歴史があります。自然史博物館、県立の博物館としては、ちょうど今年で40年目になりますが、ちょうど100年前にその前身となる秩父鉄道さんが作られた標本展示室が開設されました。絵葉書としてのみ写真が残ってるんですけど、ここにこれが建てられたのは古くから秩父にたく



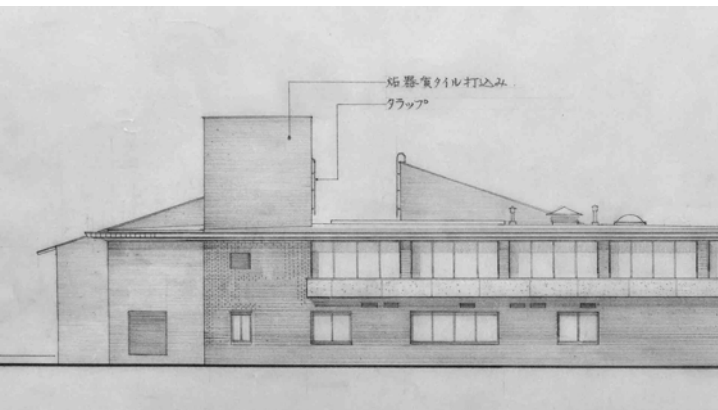
さんの研究者が訪れて、地質学の黎明期、明治時代から研究が盛んだったためです。

これが戦中に荒廃していたところを、戦後、本当に間もない昭和24年に、同じく秩父鉄道が、この時代としては非常に珍しい秩父自然科学博物館をオープンしました。この博物館が建っていた場所が今の博物館が建つ場所なんですね。そこに前川國男さんの設計で県立博物館を建てたということなんです。

地の力を象徴する由緒あるメタセコイアと共に建つ博物館

展示の準備をしていたら古い写真がたくさん出てきました。これが建設当時の様子です。この写真は、1階部分の施工が終わって屋根の部分にあたるコンクリートスラブを載せているところです。建設風景も非常に趣があり、前川建築はモノクロが非常に似合うなど





感じています。

これが設計図です。橋本所長が事務所に保存されていた貴重な設計図をそのままお貸しくださいました。これが非常に芸術的なんですね。今だとCADで設計されるということなのですが、すべて手描きですので、ひとつひとつのこの鉛筆の線が非常に細かくて、正確で、とても美しいなあと思いました。10月30日から始まる展示で、是非ご覧になっていただきたいと思います。

これは残念ながら写真でしか残っていないんですが、建築模型です。これを見ていただくと、自然の博物館の構成が分かっていただけだと思います。長いアプローチを通して、正面玄関があります。そして、展示スペースがこちらになります。歴史と民俗の博物館に比べまして、規模が大変小さく、おそらく30分ぐらいでご覧になっていただけたと思います。

正面玄関を入りますと真ん中にオリエンテーションホールという吹き抜けのホールがありまして、右側が地学展示ホール、左側が生物展示ホールという構成になっております。それから、こちらがバックヤードの部分で、1階の部分が収蔵庫となっています。

もともと、先ほどご紹介した秩父自然科学博物館がここに建っていましたが、その建物を残したまま、新しい自然史博物館を建築し、それが出来上がった後に展示物を移し、その後、取り壊すという過程を取られたそうです。その時に「地の力」を象徴する存在として、メタセコイアを残して活かしながら新しい博物館を建てています。この木はかつては化石でしか見つからない木だったんですが、中国の奥地で発見されました。当館にあるメタセコイアは、それをアメリカに持ち帰り、そこで増やしたものを植えたという、非常に歴史のあるものです。今はいろんな公園にメタセコイアがありますが、当館のメタセコイアは非常に由緒があるものです。

これが、開館の時の前川國男建築設計事務所のスタッフのみなさんの写真です。博物館に残っておりました。お分かりになりますか？橋本所長もいらっしゃるんですが、一番左が前川國男さん、その右が二代目の田中所長、一番右が三代目の橋本所長ということで、スタッフが勢揃いして開館式に向かう写真です。

こちらの写真は橋本所長から頂きました開館当初の外観です。これは非常に貴重な写真で、もう二度と撮れないんですね。なぜかという、今は周りの木が成長してしまって、まさに





アプローチ外観

前川建築設計事務所 提供



開館当初の
オリエンテーションホール

自然と一体になって壁面が見えないぐらいになっています。前川建築の特徴である自然に溶け込む建築が、まさに自然に溶け込んでしまって、博物館がどこにあるか分からなくなっているという状況です。そのため今は、これぞ前川建築の博物館という外観がなかなか撮れないのが悩みどころです。

メガロドンの展示が映える吹き抜けの玄関ホール

これが今の博物館です。ここにカルカロドンメガロドンというサメが見えています。深谷市（旧川本町）の荒川の川床から歯の化石が発見されて、これが世界的に非常に重要な発見になりました。これはその生体復元模型を、10周年の時に作ったものです。開館当初はなかったんですが、これがちょうどこの玄関の吹き抜けの正面に、迫力ある外観を見せておりました、あたかもあらかじめ計算されたような造形になっています。

このメガロドンが「MEG」という映画にもなりましたので、皆さん、とても印象的らしくて、非常に喜んでいただいています。これが中から見たメガロドンですが、その上にコンクリートスラブの天井がありまして、ここに成層圏ブルーというこだわりの青い色が塗られています。まるで海の中に居るようなところも、まさに計算されていたんじゃないかと思うような空間になっています。

これがカルカロドン メガロドン設置のときの写真です。12mもあるのでそのまま持つて

くることができず、このように半分ずつ作ってトレーラーで運び、このホールの中でくっつけて、継ぎ目をわからなくして吊るしています。そもそも12mもありますので、バランスを崩してひっくり返ってしまうともう起こせなくなるそうです。それで慎重に足場を組んで上げたのですが、最後にコンクリートアンカーが打てなかったそうです。つまり、こ

現在の博物館



正面玄関

現在の博物館



オリエンテーションホール
体長約12mのカルカロドン
メガロドン生体復元模型
(設立10周年記念)

カルカロドン メガロドン
生体復元模型設置作業
(設立10周年記念)



のコンクリートスラブが緻密すぎて、普通の重機では穴が開かず、急遽、建築会社の方に来ていただいて、なんとか開けて無事吊すことができたと聞いております。作業が深夜に及んだようで、この写真は真夜中に撮ったものだそうです。サメが浮き上がっておりますけれども、これがいまだに当館のシンボルの展示となっております。

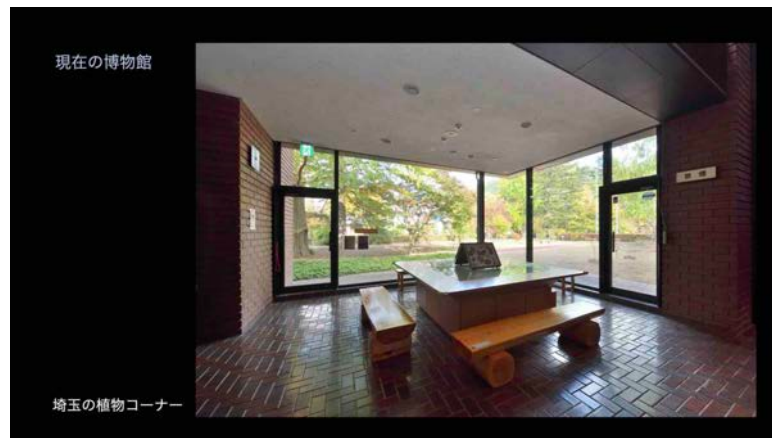
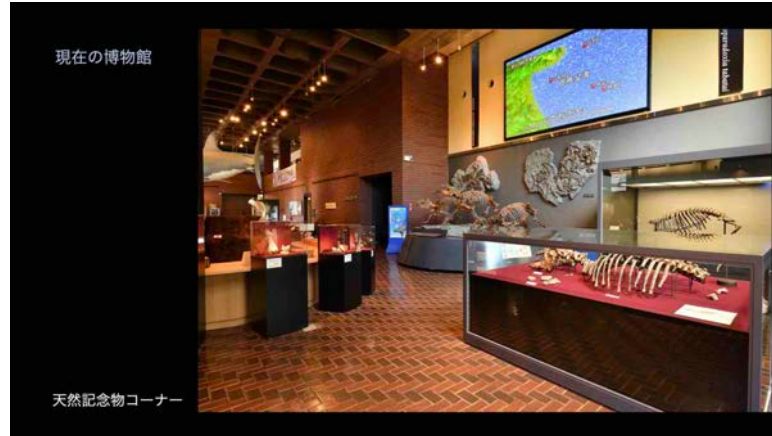
外の景色を展示物に

これは館内の様子です。真ん中のオリエンテーションホールに高い吹き抜けを利用して、特に重要なものを展示をしております。これが最近、天然記念物に一括して指定されたパレオパラドキシアという哺乳類で、これも埼玉県が誇る非常に貴重な化石です。開館当初の写真を見ると、オリエンテーションホールの真ん中にこの3体のパレオパラドキシアしかなかったんですが、今は展示がどんどん充実して、むしろ雑多な感じになってしまっているかもしれません。

これが、オリエンテーションホールの一番奥ですね。中庭がありまして、今、「カエデの森」と呼んでいます。カエデの森に、埼玉県に自生する21種の楓を植えて、今、育つのを待っているところです。ここは、そのカエデの森の観察スペース兼休憩スペースになっています。これは橋本所長が当館に来てくださったときに聞いて初めて知ったんですが、当館は規模が小さいので10周年を目処に、初めは建て増しをする予定だったので、そのためにここから建て増した建物に行けるように設計して下さっているということです。この場所、確かに柱がないんですよ。残念ながらその話はなかったことになりまして今に至っておりますので、今、この風景を楽しんでいただけます。

展示室の高さを活かした本物志向のジオラマと迫力のある剥ぎ取り標本

こちらが生物展示ホールです。これも高さを活かして迫力のある展示になっております。この中のジオラマ自体も当時こだわって作って、クオリティの非常に高いものになっております。ほぼ全てが実物で、この岩も実際の岩からきちんと型どりをして、それをもとに京都で作って、それを運んで設置したものですし、この木も全部本物です。針葉樹の葉も本物に着色していますが、落葉樹の葉だけは1枚1枚型どりをしたレプリカ、あと花びらもレプリカで作ら



れています。こちらの剥製も、もう今は秩父に唯一の、ひとりしかいないと言われる剥製作家の方に、本物がまるで生きているかのような形で作っていただいています。この展示はもう開館以来40年変わっていませんが、未だに子供達に大人気でライトを押して動物を

探すという形になっていて、行くとたびに新たな発見がある展示になっています。今、新型コロナウイルスの関係でライトが押せないのですが、建物と同時に展示も古びない博物館だと実感しております。

こちらが地学展示ホールです。地層の剥ぎ取り標本がそのまま、天井の高さを活かして展示されています。このように生物展示ホールと地学展示ホールが中央のオリエンテーションホールの両側に配置されております。

現在の博物館

地学展示ホール



博物館100年の歴史を紹介した特別展を開催

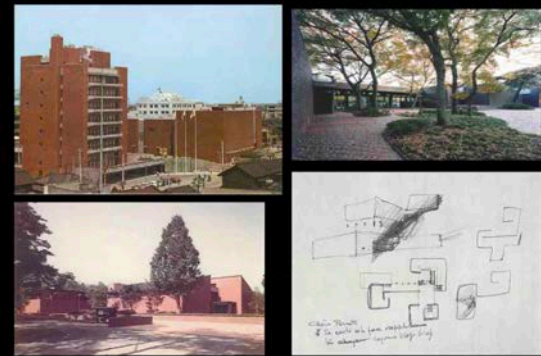
「自然の博物館100年の軌跡」という特別展を、来たる10月30日（2021年）から行います。自然史博物館としての40年前のスタートも含め、その前を100年間さかのぼった展示をしております。先ほども申し上げましたとおり、埼玉県立自然史博物館の設計図面も展示させていただいております。それから、橋本所長のご寄稿も入った展示図録も販売しております。当館でしか買えませんので、是非この秋に来ていただければと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

第2部 「埼玉県の3つの前川建築をとおして ～前川國男が求めた建築の地平を俯瞰する～」

橋本 功 (株式会社前川建築設計事務所 代表取締役所長)

1945年神奈川県生まれ、1970年日本大学工学部建築学科卒業後(株)前川國男建築設計事務所入所、1994年(株)前川建築設計事務所取締役、2000年代表取締役に就任、現在に至る。担当した主な作品は、福岡市美術館(1979)、埼玉県立自然史博物館(1981)(現・埼玉県立自然の博物館)、国立音楽大学講堂(1983)・国立音楽大学附属幼稚園(1984)・附属中・高等学校増築(1995)・附属小学校(2008)、千葉県東総文化会館(1991)、埼玉県児玉町総合文化会館(1995)、など。この間、弘前市から熊本県までの、使われている全国の前川建築の保全改修や前川建築に関する様々な活動に精力的に係わり続けている。

埼玉県にある3つの前川建築をとおして
～前川國男が求めた建築の地平を俯瞰する～



ただいまご紹介いただきました前川建築設計事務所の橋本です。先ほど、何十年か前の写真を見て、当時はずいぶんスリムだったんだなと思いました。

今回のテーマは、埼玉県にある「3つの前川建築をとおして～前川國男が求めた建築の地平を俯瞰する～」と題して、前川が生涯を通して何をやろうとしていたのか、を探るということでございます。

激動と荒廃の時代の少年期に会うジョン・ラスキン

まずは前川が生きた時代を辿りまして、時代に対してそれぞれどういう思いで建築を考えてきたか、どのようにしてその考えが生まれ、またどのようにして時代とともに育まれていったのか、この辺りからお話をしたいと思います。

前川は、日露戦争が終結しました4ヶ月前、1905年5月14日に、新潟の学校町で生まれております。当時、信濃川で治水工事を担当しておりました、当時の内務省、今で言うと、総務省とか国交省とか警察とかが一体になった省ですね、その土木技師の父の前川貫一、母の菊枝の長男として生まれております。これは当時、前川の9ヶ月の写真ですね。

父のあぐらに前川が抱かれながら「お前は大きくなったらおうちを作る人になってほしいなあ」と言う父の言葉を聞いて、前川は建築家になるのが当たり前だと思って育てております。

前川が4歳の時に、父の転勤で東京の本郷に引っ越しております。そして1914年、前川が9歳、小学校3年生ぐらいの時、第一次世界大戦を迎えまして、第一次世界大戦が終わった1918年、現在の日比谷高校の前身である東京府立第一中学校に入学しております。さらに高等学校に入学しました1922



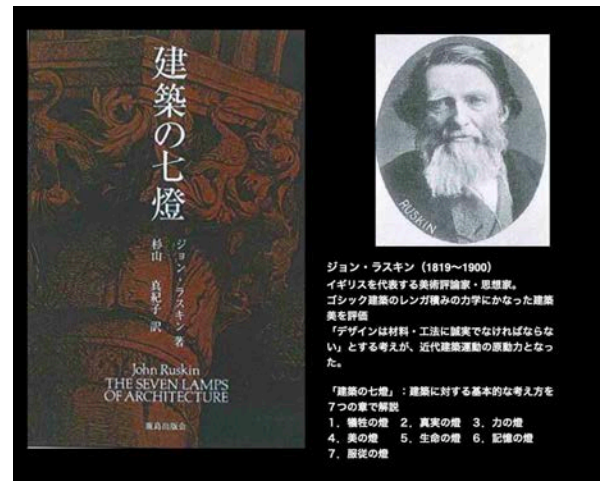
年の翌年、1923年には関東大震災を経験してるんですね。これが前川が14歳の中学1年生のとき。これが前川が一高の時の写真です。

こうして多感な、いわゆる少年期というものを、戦争と災害、言うなれば激動と荒廃の時代を過ごしたわけですけども、高校時代に、19世紀のイギリスを代表する美術評論家、思想家でもありますジョン・ラスキンの本「建築の七燈」を読みまして、生涯にわたる大きな影響を受けております。

ジョン・ラスキンは、ゴシック建築のレンガ積みの力学にかなって生まれたデザインの美を大変称賛しておりまして、「デザインは材料・工法に誠実でなければならない」と言っているんですが、この言葉、考え方が、後のいわゆる近代建築運動の原動力になっているということでもあります。

ちなみに近代建築運動というのは皆さんもご存じのように、18世紀から19世紀にかけてイギリスで起こりました産業革命、これによって人力から動力へ、あるいは道具から機械へと生産構造が大きく変わる中で、いわゆる資産階級、労働者階級というものが生まれまして、それによって市民意識というものが非常に高まってくる。人間を中心に社会を考えていこうとする近代主義という考えがあるんですが、そうした中で建築の分野においては、今までなかった新しい材料、すなわち鉄骨あるいは鉄筋コンクリート造という理論と施工方法がこの時代に確立します。これによって、今までの石やレンガを積んだ重い建築から鉄筋コンクリート造の理論による柱と梁構造、いわゆる軸組工法ですね、そういう軽い建築が可能になり、さらに、人間のスケール感とか合理性を考えて建築を作ろうとするコルビュジエを代表とするような合理主義建築が提案されました。西洋を中心とするこうした動きを近代建築運動といい、この運動の中で現れた建築を近代建築といいます。

話を戻しまして、1925年に前川は、東京帝国大学に入ります。これは入学式の写真です。当時、西洋は近代建築のいわゆる黎明期ということでドイツ表現主義やバウハウス、こういう運動が盛んだったんですが、一方、コルビュジエが提唱する近代合理主義というものが台頭してきた時期でもありました。多くの学生がこの表現主義、バウハウスに夢中になっている中で、前川はフランス語を独学で勉強しまして、フランスの雑誌を購入して、そこで描かれているコルビュジエの写真や建築を勉強するわけです。また、先生でありました岸田日出刀がフランスから持ち帰った本を読んだりして、コルビュジエの考え方にすごく共感するわけですね。そして、「あなたの元で学びたい」と手紙を出すわけです。考えてみますと、高校時代に近代建築の原動力となったジョン・ラスキンの本を読んで夢中になっていた前川を、のちに近代建築をリードしたコルビュジエのもとに走らせたということは、ある意味では必然の帰結であったと、今から思えば感じます。高校時代に色々学んだことは、最後まで前川の中に大きな影響を残しております。



ジョン・ラスキン (1819~1900)
イギリスを代表する美術評論家・思想家。
ゴシック建築のレンガ積みの力学にかなった建築
美を評語
「デザインは材料・工法に誠実でなければならない」とする考えが、近代建築運動の原動力とな
った。

「建築の七燈」：建築に対する基本的な考え方を
7つの章で解説
1. 犠牲の燈 2. 真実の燈 3. 力の燈
4. 美の燈 5. 生命の燈 6. 記憶の燈
7. 歴史の燈



1925年4月
前列中央 岸田日出刀 (左) 佐藤勝雄 (右) その他は専任講師
中央列左から3人目以前川篤男 4人目に橋山平吾
右から3人目に谷口吉義 前列右から3人目に市川龍

コルビュジエのもとでヨーロッパの近代建築家たちと学んだ2年間

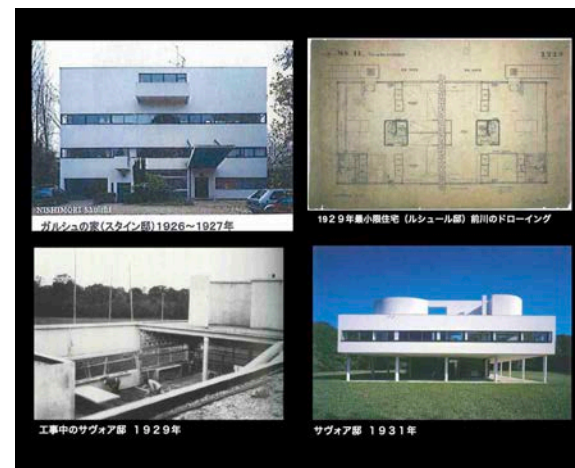
コルビュジエのもとに行きたいって手紙を出したこの時に、前川の身元保証人になったのが、母、菊枝のお兄さん、佐藤尚武で、弘前出身の外交官に佐藤愛磨さんという人がおるんですが、その人の養子になりまして、その後、外交官になりました。前川がコルビュジエの元に行こうとしていた当時は、国際連盟の日本事務局長としてパリにいたので、そこに前川は転がり込んだわけです。佐藤尚武は、「青い目の嫁さんをもたらさない。それから2年間」という条件で前川の身元引受人となりました。



コルビュジエから入門OKをもらった前川は、1928年3月31日、これもちょっと伝説化されちゃっておりますけれども、卒業式の夜にシベリア鉄道でパリに向かいます。そして4月17日にパリに着いて、翌18日、モンパルナスのほど近い、中庭を囲む僧院の回廊を改装した、セーブル街35番地のコルビュジエのアトリエの門を叩きます。前川が事務所に入りました頃はほとんど外国人ばかりで、みんな無給で働いていたと言います。フランス人はシャルロット・ペリアンと弟のピエール・ジャンヌレの2人だけ。要するに、フランスではまだコルビュジエは異端だった

たんですね。アカデミズムに逆らっておりましたので、誰もフランスの学生は来ない。

前川がコルビュジエの事務所に入った時代の頃は、ちょうどヨーロッパではまさに近代建築というものが出始めた成熟期で、前川が入った4月から2か月後の6月26日には、ヨーロッパ各国の近代建築家たちが集まって、第1回国際建築家会議CIAMが開かれようとしていた時代なんですね。コルビュジエの事務所で前川は、完成したばかりのガルシュの家、スタイン邸と言いますが、それからコルビュジエで代表作と言われているサヴォア邸。それからあと最小限住宅、ルシュール邸って言うんですけど、これは前川の直筆でコルビュジエ財団にあります。これを持って1929年、ドイツのフランクフルトで行われた第2回国際建築家会議にコルビュジエの代理として出席しております。そういうことで2年間、前川は近代建築を身をもって学んだわけです。



帰国後はレーモンド事務所で実務を学んで、独立するも・・・

ちょうど2年後、1930年の4月に前川は帰国しまして、8月にレーモンド事務所に入っております。アントニン・レーモンドはチェコ生まれのアメリカ人で、1919年、帝国ホテルの建設のためにフランク・ロイド・ライトが日本に来ているんですが、その助手として一緒に日本に来ております。そして1922年に、事務所を東京で開設しております。ここで前川は、建築の実務、建築設計事務所の経営と、あとアメリカ流の建築家の職能について学んだわけです。

これが前川で、レーモンド、奥さんのノエミさんですね。この当時、レーモンド事務所にいたのが吉村順三さん。ジョージ・ナカジマさんがここにおられますね。錚々たる日本の初期の建築家たちが、おられたわけです。

前川は5年間、レーモンド事務所におり、その後、1935年に独立して前川國男建築設計事務所を開設します。初めの仕事

が、森永キャンディーストアアの改修工事なんですね。仕事がない中で前川

は、すべての設計競技に参加しようと、東京市庁舎、ひのもと会館とかパリ万博の日本館などに参加しますが、まあだいたいほとんど落ちて、また時代が時代なので実現している物はほとんどありませんでした。一方、実務では笠間邸、これも数年前に無くなりましたけども。それから岸記念館。それから1942年竣工の前川の自邸、これは今、東京小金井の江戸東京たても園に移されておりますが、こういうことをやっていたわけです。



1935年の頃

後列左から 小西田平太郎 石川信雄 橋本小五郎 藤井敏 吉岡淳一 中島 田中誠 寺島幸次郎 高平健二 奥田寛
前列左から 沢木嘉夫 吉田謙吉 アントニン・レーモンド ノエミ 杉山謙吉 中塚清隆 吉村順三 天野正治 小野誠三 中川龍太郎

参加しようと、東京市庁舎、ひのもと会館とかパリ万博の日本館などに参加しますが、まあだいたいほとんど落ちて、また時代が時代なので実現している物はほとんどありませんでした。一方、実務では笠間邸、これも数年前に無くなりましたけども。それから岸記念館。それから1942年竣工の前川の自邸、これは今、東京小金井の江戸東京たても園に移されておりますが、こういうことをやっていたわけです。

戦後の混迷した状況が残っていた1950年代、いわゆる社会体制の復興が進む中で、前川は、コルビュジエから学んだ近代建築を日本に定着しようと奮闘努力します。しかし、欧米の近代建築は鉄やコンクリートの建築技術が進んでいましたが、日本では残念ながらそういう技術がまだ未熟であった。そこで、前川は日本における近代建築を動かすためには、まずは建築技術の向上が第一だと考えるわけです。こうした時代の思いを前川は、1951年の雑誌でこのように言っております。

「われわれは何よりもまず、この第二段階の克服、」第一段階は分離派等の近代建築の運動を指しておりますが、いよいよそれが動き出すことになる第二段階としては、「建築技術の諸問題を通してのデザインに努力しなければならない。これをしない限り、いつまで経っても日本の近代建築はごまかしつづけるだけで、『ほんもの』になるときがこないであろう。」

当時、実際には木造で近代建築風の建物を作ったりしている人たちもいたわけですね。しかし、ちゃんとした技術を身につけた上でやらないと、それは本物ではないという考えです。さらには1953年の論評では、

「単なる造形的興味からする絵空事ではない建築の、技術的な経済的な前提からの形の追求を今身につけなかったならば、日本の近代建築は永久にひとつのファッションになってしまうだろう。」

さらに当時を振り返りまして、1981年には、

- 1951年「感想—下関市庁舎競技設計に関連して」〈建築雑誌〉5月号
 - ・われわれは何よりもまず、この第二段階の克服、つまり技術的諸問題を通してのデザインに努力しなければならない。これをしない限り、いつまで経っても日本の近代建築はごまかしをつづけるだけで、『ほんもの』になるときがこないであろう。
- 1953年「日本新建築の課題」〈国際建築〉1月号
 - ・単なる造形的興味からする絵空事でない建築の、技術的な経済的な前提からの形の追求を今身につけなかったならば、日本の新建築は永久にひとつのファッションに終始せねばならないであろう。
- 1981年「この道ひとすじ原点を見つめる建築家」〈れんが：日本れんが協会発行〉第2号
 - ・建築はファッションではない。建物のディテールを考えることによって表面の形がでてこないといけない。コンクリート建築にしろ、打込みれんがにしても、それらしいファサードがでてこなければいけない。まず素材に対する基本的なテクニカル・アプローチを身につけた上で、その素材を縦横に駆使してこそ建築は自由が獲得できる。

「建築はファッションではない。建築のディテール」いわゆる納まり「を考えることによって表面の形がでてこないといけない。コンクリート建築にしる、打込みレンガにしても、それらしいファサード」正面性、立面図「が出てこなければいけない。まずは建築素材に対する基本的なテクニカル・アプローチを身につけた上で、その素材を縦横に駆使してこそ建築は自由が獲得できる。」と言ってるんです。

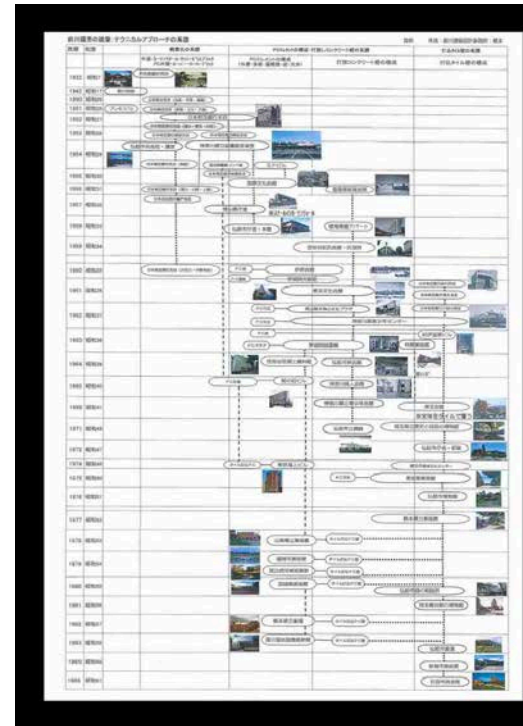
テクニカル・アプローチ第1期 プレキャストによる軽い建築

こうした前川の建築の考え方は、テクニカル・アプローチと呼ばれて、前川の建築思想、あるいは設計工法、手法を表すキーワードになりました。このキーワードには三つの時代的な流れがあります。お手元の資料「テクニカルアプローチの三つの変遷、系譜の変遷」をご覧ください。

はじめに取り組んだのが、第1期1950年代頃の建築の軽量化、工業化の時代です。建築の軽量化、工業化とはどういうことかという、近代建築の要素と言われている、いわゆるフリープラン、自由な平面、それからフリーファサード、自由な外装、ピロティを造る、連続連窓、こういうものの実現に向けて構造を剥き出しにしたシンプルな建築の軽量化、こうした建築構成を可能とする建築素材、部材の工業化ということです。

具体的に部材の工業化は、工場であらかじめ製作するプレキャスト

トというのがあります。床や壁、あるいは階段や手すり、ルーバーなどというものをプレキャスト化をして、部材を現場で取り付けるという考え方です。その代表作としての建築は、1952年の、これもなくなりました日本相互銀行本店。それから1954年のミドビル、四谷にある私共が勤めている事務所です。それから1954年の神奈川県立音楽堂図書館。桜木町から紅葉坂を上っていったところにあります。それから1955年の国際文化会館。これは六本木にあります。



テクニカル・アプローチ第2期 人間を主体とする建築の回帰

第2期は1950年代から1960年代の打放しのコンクリートの建築ということになります。1950年代を迎えますと、戦後復興から5~6年経って社会体制整備が大分進んでまいります。高度経済成長を迎えて技術革新による大量生産、大量消費、いわゆる消費社会を迎えていくわけですね。所得倍増計画とかそういうものが、この時代に出てくるわけです。さらには1964年に東京オリンピックを迎え

年	月	出来事	関係者
1956	昭和31	12月日本国連加盟 水俣病 日本建築家協会設立 五期会結成	福島教育会館
1957	昭和32	10月ソ連人工衛星打上 南極観測昭和基地建設 東京都庁舎(丹下健三) アメリカ人工衛星打上	52
1958	昭和33	東京タワー 香川県庁舎(丹下健三)	ブリュッセル万国博 講海アパート
1959	昭和34	キューバ革命政府 皇太子・美智子様御成婚 伊勢湾台風 水俣病閉学 西洋美術展(ル・コルビュジエ)	54
1960	昭和35	池田内閣所得増進政策発表 日米安保条約反対競争 大量生産・大量消費の消費社会到来(～1970年代初め) メタボリズム 東京計画(丹下健三)	55
1961	昭和36	日本消費者協会設立 ソ連有人宇宙船ポストーク1号打上 伊ナズ 医学研究所(伊・ナ)	東京文化会館
1962	昭和37	全国総合開発計画発表 キューバ封鎖 サリドマイド薬害事件 『沈黙の春』レイチェル・カーソン著 全国建築士事務所協会設立 国立劇場コンパ ケネディ暗殺	57
1963	昭和38	建築基準法改正 京都国際会館コンパ	58
1964	昭和39	東京オリンピック 東海道新幹線開通 新潟地震 国立屋内競技場(丹下健三)	59

ますので、これを契機として、新幹線ができたり、建築需要の拡大、あるいはそれによって都市開発が全国を襲うわけです。

こういう状況の中で、一方では水俣病が59年に出てきたり、自然破壊がどんどん全国的に進んでくる。これは世界的な現象で、ドイツの哲学者のオスヴァルト・シュペングラーという人が書いた「西洋の没落」という訳本が1971年頃に刊行されたり、また62年ごろにはレイチェル・カーソンというアメリカの生物学者が、いわゆる洗剤で海がどんどん汚れ、生物が死んでいくことを書いた「沈黙の春」という有名な本が出て世界的に注目されていく。すなわち、近代という時代に対する世界的なレベルでの警鐘、西洋文明に対する、近代化に対する警鐘が発せられてくるわけです。

こうした状況の中で、本来、人間を主体とする近代主義の社会像を映し出す近代建築が近代化の名の下に、市場経済の原理に、あるいは論理に流されていく。人間が翻弄されていく。そして、こういう様を見て前川は、フランスの詩人ポール・ヴァレリーの「今日の状況まで高めたのは人間の精神があった。しかし、その同じ人間の精神がどんどん没落してゆくのは、なぜか。それを取り戻せるだろうか。」という言葉を引き合いに出しながらも、いわゆる精神のない専門家、技術至上主義で精神を持たない専門家、あるいは人間精神の退廃、こういうものをもたらす日本の近代合理主義の行く末に危機感を募らせるわけです。そして、近代建築の初心をもう一回、自ら振り返るわけです。

この時の思いを晩年の1984年に新建築の1月号で、前川は次のように言っております。

「結局ぼくは、合理主義の建築というものの限界を見たような気がして、建築というものは、たとえば経済的な合理性ばかり追求してもどうにもならないんだというようなことを身につまされて知ったわけだ。・・・コルビュジエは近代建築というものはラショナルイズム、いわゆる合理主義の建築だとはっきりいっていたけれど、ぼくはそのラショナルイズムの建築というものはそのままでは日本では痩せた建築になっていくと思った。・・・痩せた、老いさらばえた建築を近代建築で合理化、正当化するのはまずいと思って、そのころやたらと大きな庇のある屋根のある建築を設計した。」というふうに文章で書いているわけです。

このころの前川建築は従いまして、先ほどの軽い建築から打放しコンクリートによるブルータルな重い建築へと変わっていくわけですね。それは前川が、「どうも日本では、近代合理主義の考え方というものが資本の論理で流されていってしまっていて、うまく育っていない。ならば、近代建築の合理化から人間の精神的なものが不足している中で、そうしたものを答えられる建築を造っていかうじゃないか」という、人間を主体とする建築の回帰を目指して変化した時代がこの第2期の時代なんです。

この代表作として1956年の福島教育会館。1960年の世田谷の区民会館庁舎。これは再来年ごろに無くなってしまいますが、今まだ一部工事中でありますので多少見ることは出来ます。それから1961年、上野にあります東京文化会館。それから紅葉ヶ丘にあります1962年の青少年センター、1960年の京都府会館。こういうものが打放しコンクリートの時代の主な内容になります。

●「建築における《真実・フィクション・永遠性・様式・方法論》をめくって」
(新建築) 1984年1月号

・結局ぼくは、合理主義の建築というものの限界を見たような気がして、建築というものは、たとえば経済的な合理性ばかり追求してもどうにもならないんだというようなことを身につまされて知ったわけだ。(中略)

コルビュジエは近代建築というものはラショナルイズム(合理主義)の建築だとはっきりいっていたけれど、ぼくはそのラショナルイズムの建築というものはそのままでは日本ではやせた建築になっていくと思った。

やせた、老いさらばえた建築を近代建築で合理化、正当化するのはまずいと思って、そのころやたらと大きな屋根のある建築を設計した。



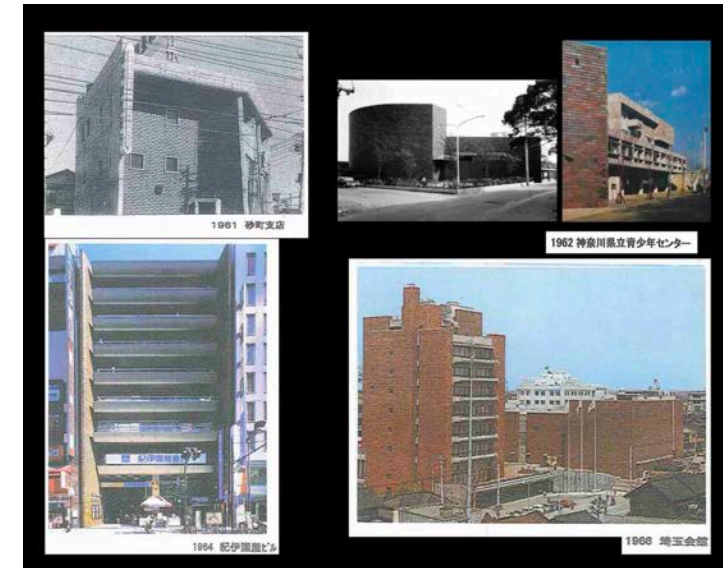
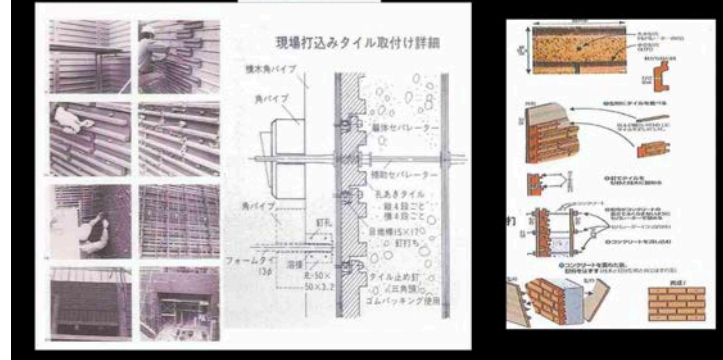
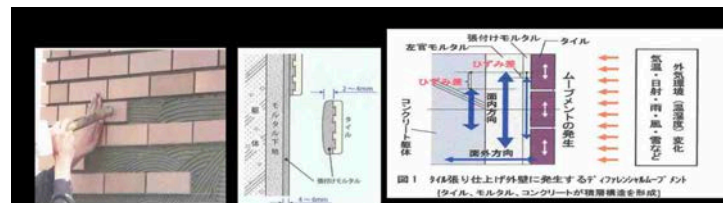
テクニカル・アプローチ第3期 打込みタイル工法でコンクリートの長寿命化

そして第3期。1960年から75年以降の、打込みタイルの建築に変わっていく時代です。1970年に大阪万博を迎えまして、消費社会からさらに進んだいわゆるバブル経済という時代を迎えます。建築はどんどん壊して造り替えた方が経済的生産性が高いというスクラップアンドビルドが横行し、さらには自然破壊や環境破壊もどんどん進んで、川崎病などの大気汚染が問題になる。酸性雨が降る。それによってコンクリートの劣化がものすごく進んでくるということが大きな社会問題になったわけです。50年あるいは60年持つというコンクリートが、酸性雨でやられてきて表層がボロボロになって、40年しか持たないという現象がどんどん出てきたわけです。こうした状況にさらに危機感を覚えた前川は、物性的にも化学的にも安定しているタイル、日本に昔からあるタイルで建物を覆おうということを考え出すわけですね。これがこの第3期の打込みタイル工法という建築になるわけです。

打込みタイル工法というのは何なのっていう話になるんですけど、一般的なタイルは、コンクリートを下地にしてモルタルを塗ってタイルを貼っていくわけです。こうしますと長い年月の間には、それぞれの材料の境界面で、温湿度による膨張係数の違いで歪みが起きたり、あるいは地震などの外力により境界面で歪みが起きる。そうすると、接着力が優っている間はいいんだけど、そのバランスが崩れると境界面からタイルがバサッと落ちたりすることがよくあります。これを相対歪、ディファレンシャルムーブメントと言います。これを防ぐために初めにコンクリートを流す型枠にタイルを釘で止め、そしてコンクリートを流してタイルと一体化する。タイルが物理的にコンクリートと一体化する。これを打込みタイル工法といい、打込まれたタイルを打込みタイルと言います。

打込みタイル工法が初めて使われたのが、1961年の日本相互銀行砂町支店、これもなくなっておりますが。それから公共建築では1962年の神奈川県立青少年センターのフライズ、舞台周りの外壁に打込みタイルを初めて使っております。それから1964年の新宿にあります紀伊国屋書店ビルの両サイドの壁が打込みタイルです。そして1966年の埼玉会館で初めて、建物全体を打込みタイルで纏った建築を設計します。

年	昭和	事件	建築	備考
1962	昭和37	全国総合開発計画発表	ニューバ経済	57 神奈川県立青少年センター
1963	昭和38	バブル景気に伴った高度経済成長	大規模のビル・レイチェル・カーソン著	58
1964	昭和39	東京オリンピック	新建築新建築雑誌	59 弘前市市民会館
1965	昭和40	東・北ベトナム戦争開始	新建築雑誌	60 埼玉会館
1966	昭和41	中国文化大革命	この頃から大気汚染・公害問題顕著	61
1967	昭和42	東京都知事選挙	新建築雑誌	62
1968	昭和43	消費者保護基本法公布	ベトナム反戦・大学闘争続出	63 日本建築学会大会会場
1969	昭和44	家賃の引き上げ	新建築雑誌	64
1970	昭和45	大阪万国博覧会開催	新建築雑誌	65 日本万博自動車館・鉄道館
1971	昭和46	環境庁設置	新建築雑誌	66 埼玉県歴史と民俗の博物館
1972	昭和47	日中文化交流	新建築雑誌	67
1973	昭和48	石油ショック	新建築雑誌	68
1974	昭和49	国土利用計画法公布	新建築雑誌	69 東京海上ビル
1975	昭和50	公害問題顕著	新建築雑誌	70 東京都美術館
1976	昭和51	ロッキード事件	新建築雑誌	71 弘前市博物館
1977	昭和52	巨額ハイジャック事件	新建築雑誌	72 熊本県立美術館
1978	昭和53	阪神・文化講座	新建築雑誌	73 山梨県立美術館
1979	昭和54	東中道交差	新建築雑誌	74 国立西洋美術館新館
1980	昭和55	モスクワオリンピック	新建築雑誌	75 弘前市緑の相談所
1981	昭和56	三浦市庁舎	新建築雑誌	76 宮城県立美術館
1982	昭和57	東北新幹線開通	新建築雑誌	77
1983	昭和58	三宅島大噴火	新建築雑誌	78 弘前市道徳



以後、1971年の歴史と民俗の博物館、1975年の東京都美術館、1977年の熊本県立美術館、1981年の自然の博物館、それから晩年の1983年の弘前の斎場。打込みタイルは、ずっとつながっていくわけです。

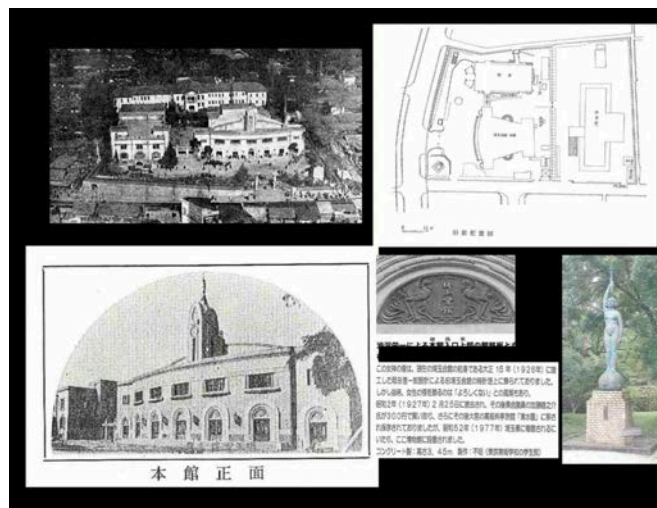
お手元にありますテクニカルアプローチの資料を見ると、建築の軽量化、打放しコンクリート建築から打込みタイルの系譜へとシフトしていく建物が、晩年の1986年まで続くことを知ることができます。さらに、タイルをプレキャストコンクリートに打ち込んだものをコンクリートの外壁に貼る、いわゆる二重にして外断熱工法で用いているのが1979年の福岡の美術館、それから西洋美術館の新館ですね。

したがって、埼玉にある3つの前川建築は、この第3期の打込みタイルの系譜にあるということがお分かりになると思います。これらを踏まえまして、これから三つの前川建築についてお話を進めます。



埼玉会館は全面打込みタイルとエスプラナード発祥の建築物

ひとつ目は埼玉会館ですが、埼玉会館の前身であります旧埼玉会館は、1923年に昭和天皇の御成婚記念で計画された岡田信一郎さんの設計によるものです。これが関東大震災で建設が遅れまして、それを渋沢栄一さんが中心として寄付を募って実現した建物です。先ほどもご紹介がありました渋沢栄一さんが書いた銘板、それから塔の上に裸婦像が乗っかっている。



この旧埼玉会館の建て替えで造られたのが、新しい前川設計による埼玉会館ということになるわけです。1966年竣工です。1,315席の大ホール、504席の小ホール、3つの展示室が地下にあります。そして15室の会議室群がありまして、これらが高層棟になっています。

埼玉会館の大きな特徴は、なんとと言っても、打込みタイルの外観にあります。

さらにあえて言えば、打込みタイルの間にメリハリをつけてフォルムにリズム感をもたらしているコンクリートの打放しの壁ですね。高層棟の庇は、杉の小幅板



の優しい感じの打放しのコンクリート仕上げ。一方、ホール入り口のアプローチのところに荒々しいコンクリートの打放しの仕上げ。この2種類の打放しの仕上げの表情が打込みタイルの合間に入っているのが、非常に大きな特徴になります。

この打込みタイルの工法は、その後の1971年の歴史と民俗の博物館以後ずっと続くという意味において、この埼玉会館というのは、それまでの前川建築の考え方、たたくまい方を大きく変えた、言うなればエポックメイキングといえますか、逆に言えば前川のその後の建築のあり方、地平あるいは展望を切り開いたマイルストーン、記念碑的な意味を持っているとすることができます。

というのは、それまでは前川の建築の軽量化、打放しコンクリートの建築も軸組工法の構造的な概念が非常に明確だったんですが、この打込みタイルは壁構造なので、空間の考え方が全然違うんですね。前川は「一建築家の信条」という本の中で、次のように言っているんです。

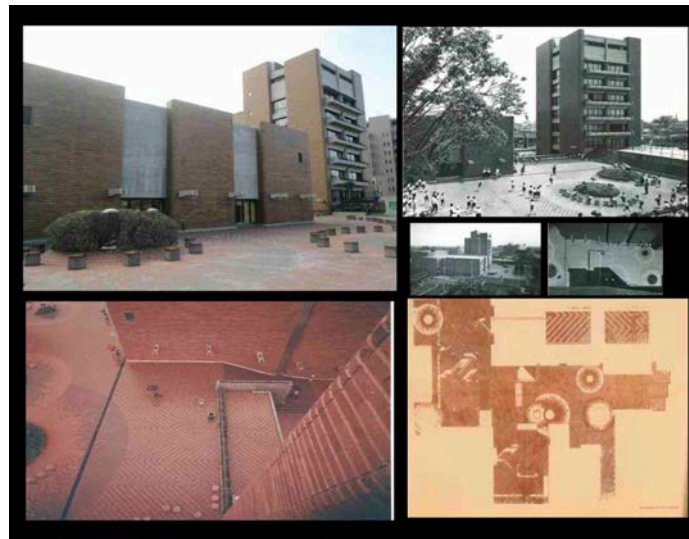
「埼玉会館は建築構造の明快さはまず空間ということですか？って質問者がすると、そうだね。そのひとつに埼玉会館が転換期だったんですかって言うと、そうだと思う。空間の処理の仕方、あるいは空間と建築をどう構成するかという問題、さらにそれを都市環境と人間の生活の関わりの中で考えていこうとするこういう考え方、市民生活的な考え方が、むしろ重要な意味を持ってきたんだ」と言っているんですね。こうした前川が考えた埼玉会館の特徴のもうひとつに、エスプラナードがあるわけです。

エスプラナードというのは、屋上のこの庭園のことを言います。そもそもエスプラナードという言葉はスペイン語を語源としておりまして、要塞とか郊外の空地、平坦地という意味。それと散策路という意味があります。一方でフランス語の空間、エスパースという言葉、それから散策というプロムナード、これを繋ぎ合わせた20世紀にできた造語であるという説もあります。エス+プラナード。フランスの場合には、いわゆる前広場、あるいはアプローチ前広場という意味があり、地図を見ますと、大きな宮殿とかの前に広大な広場がある、ナポレオン広場とかもそうですね。そういうところにエスプラナードという言葉が載っているんですね。

埼玉会館のエスプラナードはそんなに広大なものではなくて、どういう発想からこれが生まれてきたのかということに関して、前川は「現代建築の再構築」という本の中で、こう言ってるんです。

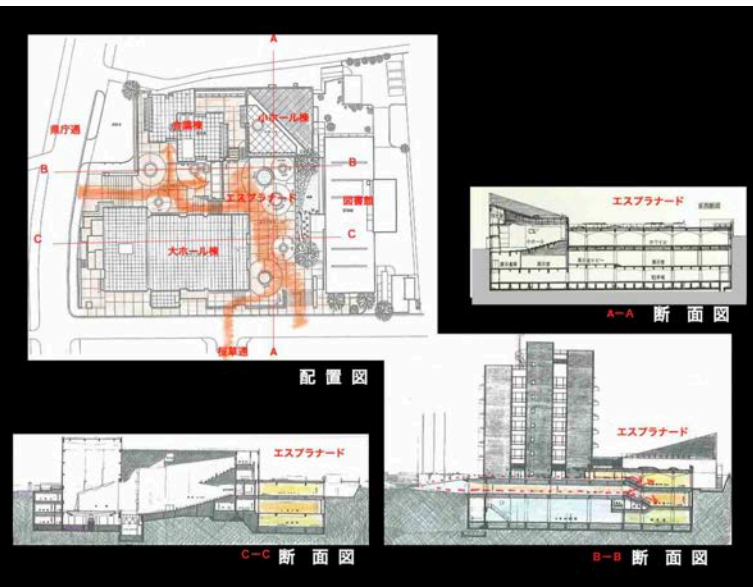
「コルビュジエとバスで乗り合わせたルーブルのチュイルリー公園に向かう途中で、コルビュジエがこのスペースがとてもいいんだと言う。ものがあるんだけど、ものを感じさせない。囲まれてるんだけど、包まれたような感じがするんだけど、広さがゆえに感じない。僕はその時に、なるほどなと思った。この言葉が、非常に記憶に残っていた。だから埼玉会館を頼まれた時に、何かで囲まれるような空間ができたらいんじゃないかな。それで建設当時は、後ろの図書館も壊すとか壊さないという話があったんだけど、あれを残してこの囲まれた空間を作った」という話が残っております。

さらには「設計者のことば」で、「私達は此の埼玉会館で敷地に不相応に大きい要求をうまく満たすと同時に、浦和の街に市民にとって『なつかしい』ひとつのオアシスにも似



た『ランデブー』を創り出したいと苦慮しました」という言い方をしています。いわゆる広場をそういう楽しい場所にしたいんだということです。さらに、「人間は文明によって自然を破壊してゆく必然があるといわれます。そうした人間自身がいつか破壊しないために、破壊しただけの自然をどこかで補償してゆくといったモラルについて、お互いに深く考える時期に来ているように思います。」ってという言葉も残しているんですね。これはまさに、5年後の歴史と民俗の博物館への取り組み姿勢を暗示させる言葉なんです。

前川が述べていた「敷地に不相応な大きな要求」とは何かということに関しては、敷地面積が9,226平米。それに対して、全体の建物の延床面積というのが18,414平米。すなわち敷地面積の倍の床面積を要求されたわけです。そのために比較的小さな部屋が多い会議室、これを高層階に持っていきまして、大きなボリュームになる大ホールと小ホールを分散配置して、床面積の60%を地下に埋めて、地上に敷地の高低差を生かした出会いのエスプラナードを作ること考えたわけです。



一方、この配置は、人の動線の分離を図っていると言うことができます。会議室の方はだいたいバラバラの時間帯で午前、午後には人の出入りがあるわけですね。それで出入りを1階の道路側にするわけなんですけど、同じ時間帯、例えば夕方6時とか9時に1,000人とか500人が出入りするホールの出入口は、会議室の出入口と分けて、このエスプラナードの中間に設けているんですね。そういう意味でこのエスプラナードという考え方を含めて全体の配置計画というのは、人の棲み分けということも行われています。さらには程よいレベルでもって段差をつけながらも、ホールへ入るルート、

あるいはこの敷地の勾配を利用してひとつの道行、浦和の駅からさくら草通りを通過して埼玉会館の東側にぶつかって流れていく。そういう道行としての広場。こういうものを考えたという意味で、前川独自のエスプラナードの考え方を作り出したと言うことができると思います。

前川自身がエスプラナードという言葉在设计に用いているのは、この埼玉会館が初めてで、その次に東京都美術館の中庭の地下に行く部分、それから福岡市美術館。そこは大濠公園の前からだんだん上に上がっていく台地になってるんですけど、その3ヶ所しか、エスプラナードという言葉を使ってないんです。そういう意味からも、この埼玉会館のエスプラナードは大きな特色であるということが言えると思います。

歴史と民俗の博物館は自然に溶け込んだムーブメントのある配置

ふたつ目は、1971年の歴史と民俗の博物館です。先程、池田さんが好きだとおっしゃってたこの空間、僕もとても好きなんです。敷地面積が12,754平米で、延床面積が10,900平米。ほぼ敷地いっぱい分散配置している地下1階、地上3階建ての建物になります。これが平面配置図ですね。正門から入って行ってわざわざ奥まで入れてエントランスロビーへ、そして食堂と展示室があり、さらに分散して展示室があって、先ほどお話に出ていた竹林と中庭の見える窓、そして奥にまた展示室がある。

この図は、人の流れと建物の配置を表したのですが、まさに樹木の中に縫うように建物が配置されている。そして、建築を構成している打込みタイトルの、壁と壁の連続と分断。その合間にある内部空間と外部空間がつながるガラスの開口部から見る、四季折々の趣を変える自然の風景に溶け込んだ独特な佇まい。こういう佇まいを、この博物館では見ることができます。

人は壁に導かれて佇み、あるいは留まり、あるいは振り返る、あるいは回遊する。こういう流れに身を委ねる人の動き、あるいは人を導く流れ、これを前川は一筆書き、ムーブメントという言い方をして「平面にはムーブメントがないといけない。プランを練ってくると一筆書きで書けるようになる。」といつも言っておりました。

博物館のパンフレットで、前川は次のように言っているんです。お手元の資料をご覧ください。

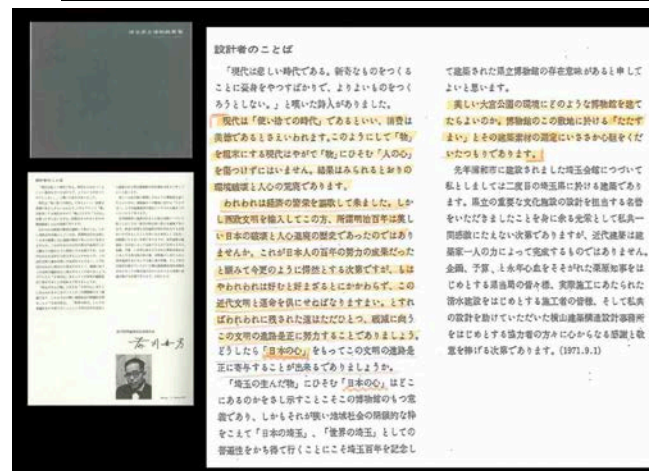
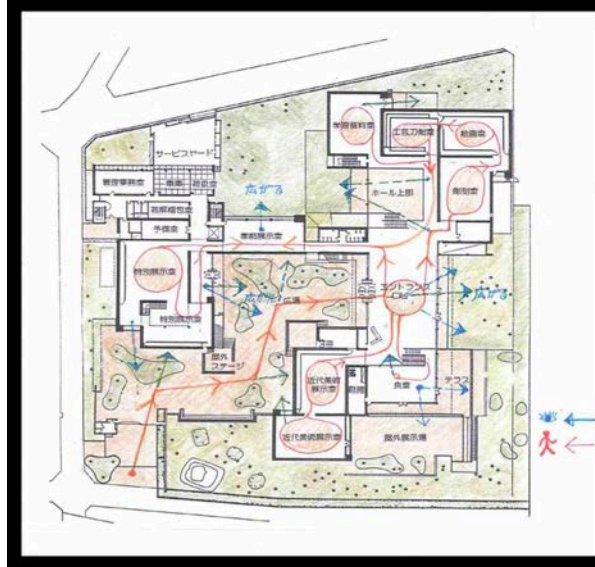
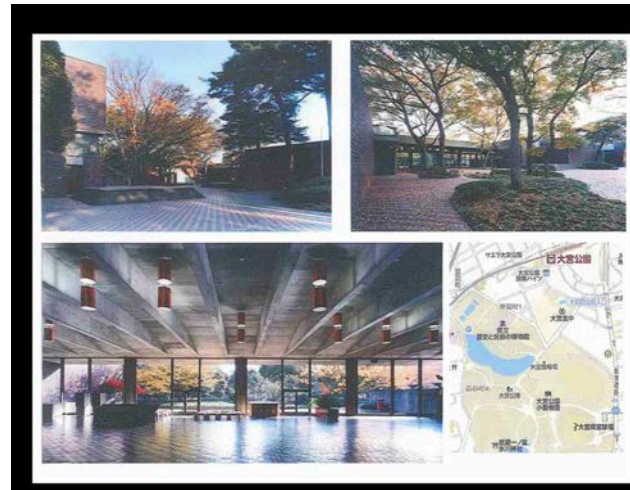
「現在は『使い捨ての時代』であるといい、消費は美德であるとさえいわれます。」って書いてますね。「このようにして『物』を粗末にする現代はやがて『物』にひそむ『人の心』を傷つけずにはいません。結果は見られるとおりの環境破壊と人心の荒廃であります。

・・・とすれば、われわれに残された道はただひとつ、破滅に向かうこの文明の進路是正に努力することでありましょう。・・・

美しい大宮公園の環境に、どのような博物館を建てたらよいか。博物館のこの敷地における『たたずまい』とその建築素材の選定にいささか心胆を砕いたつもりであります。」と言っています。

さらには11月30日の埼玉新聞に掲載された対談では、こういう事を言っておられます。その抜粋です。

「そこの環境に住んでいるホントに生き生きとした人間が生の実感を持ってないならば、その環境に美しさが出てくるはずがない。」「そういう意味で環境のデザイン、環境の設計、環境の創造と言うものが非常に大事なものではないかという気がします。」「僕はその



為、素材を土に限った。つまり壁を全部タイルでやり、長持ちする素材に限ったことは、現在の消費文明に対する僕の姿勢というか、そういうことを反映していると取ってほしい。」「大事なことは建築じゃなくて人間の生活です。人間の生活が出来上がらないといい環境、いい建築はできない。県民の方々に生活実感を博物館で何とか体得するようにしてほしいということが僕の素朴な願いです。」

と言ってるんですね。

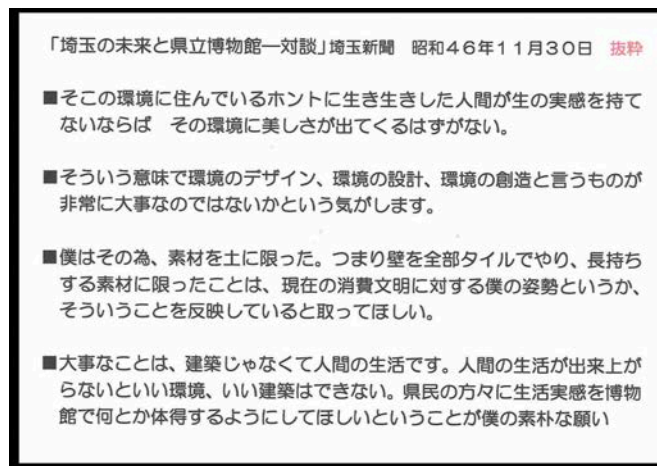
こうした前川の言葉から、1950年代の環境破壊に対して建築はどうあるべきか、人間の精神の退廃に対して人は何を建築に求めていくかということを一生涯懸命考えている。そうした思いがこの博物館に詰まっている。すなわち現代社会に失われておる、いわゆる人間の心の復権というものを願って、人間が自然と向き合うということによって得られる生の実感、生きている実感というものを持っている建築を作りたいんだと。そういうほとぼしる思いが、この「設計者のことば」から感じるわけです。言い換えれば、日本における建築の近代化を目指したという前川が、初めは西洋的な近代建築の考えをしていたんだけど、埼玉会館でタイルで空間を構成するという佇まいのあり方を確信しまして、この歴史と民俗の博物館では大宮公園の自然を借りて建築を一筆書きという流れのリズムで空間を構成することによって、日本的感性による自然と共生した風土に根ざした建築の日本の近代化を目指したという道筋を、ここで示したということが言えるように思います。

前川の建築はよく、心地よいと言われるんですけども、それを可能にしているのはまさに、この建築の自然の素材にこだわって、そして時代を超えて変えない、変わらない、長持ちする、そういう建物の中に自分の居場所を見つけて、限りある人の生命というものを感ずる精神の開放、あるいは安心感を通して、本来人間が持っている心の優しさに寄り添いたい建築づくりをめざしたことが、僕らは感じる事ができるわけです。

ポイドスラブ、ジョイントスラブと錆びが進行しない耐候性鋼の活用も

素材の使いかたということで打込みタイルという話をしましたが、歴史と民俗の博物館ではほかにも新しい試みをふたつやっております。やや専門的になるんですけども、ひとつは建築構造空間、大空間を構成する構造的な仕組み、システム作りということです。

これは岡山の林原美術館ですけども、ここでは柱を設けない大きな躯体の天井を全部このT型スラブ、プレストレスという、これは土木の高速道路でよく使っているプレキャストなんですけど、そういうものを屋根にかけています。大宮の博物館では、各展示室の空間はいわゆる大きな筒をコンクリートの中に入れて、それでコンクリートの梁性を保った面としての剛性を保つというポイドスラブで、展示室の大空間を全部構成しているわけです。これは天井ス



ラブなので、見えないんですけども。そしてエントランスの部分については、見せる構造体としてのジョイストスラブを使っているということなんですね。

前川の建築ではこの後、美術館など大きな建築の空間というのは、こういうボイドスラブやジョイストスラブを非常に多用している。その後の熊本の美術館では、見せる天井構造材としてはワッフルスラブを使っているわけです。ワッフルのような感じのコンクリートの打放しのスラブを使っております。先ほどご紹介いただきました自然の博物館にも、このワッフルスラブの構造が引き継がれていくわけです。

それからもうひとつ、この天井の構成に加えて、先ほども紹介がありましたサッシ、あるいは手すりの材料に耐候性鋼という素材を使っております。一般的に鉄は、炭素やケイ素やリン、あるいは銅などを組成とした鉱石を原料に製造しておりますが、大気中の水分と酸素と化合して錆びるわけですね。一般的な錆というのは、鉄を内部までボロボロにします。これはいわゆる酸化第二鉄、赤錆って言いますね。しかしこの鉱石の素材の中に、リンや銅が多い鉱石は表面に錆ができて、その錆が自らの錆の進行を抑えて内部への錆の進行を防ぐという性質を持っているんです。これを黒錆、四酸化第三鉄というんですけども。この性質を利用しまして、クロムとかニッケルなどを加えた材料が耐候性鋼という材料です。

これはアメリカで開発されて、日本では1959年、新日鉄がコルテン鋼という名前で製品化しております。ですから埼玉会館ではまだ、この耐候性鋼という材料は使われてないんですが、71年のこの博物館では耐候性鋼というのを使ったわけです。前川は1970年の万博の鉄鋼館で、初めて耐候性鋼のサッシを使っております。2番目がこの歴史と民俗の博物館ということになりますが、その後、自然の博物館ではサッシと手すり、そして屋根にも使ってるんですね。この屋根に使っていくということが、また非常に意味深いんです。

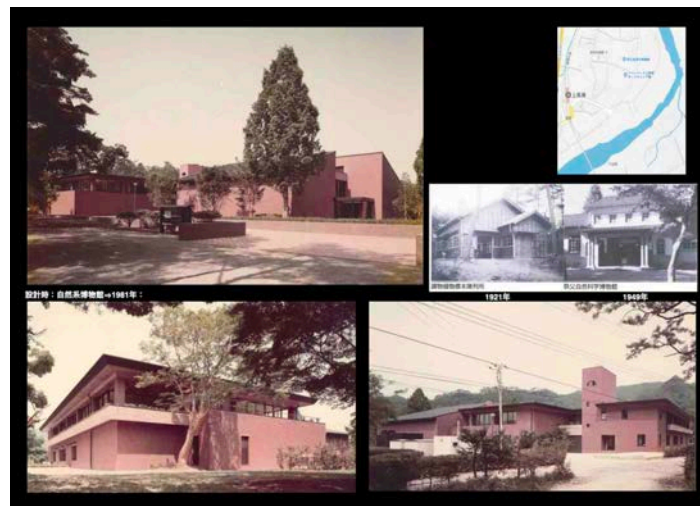
改めて整理しますと、この歴史と民俗の博物館で使っている耐候性鋼という材料は、いわゆる錆が自ら錆の進行を抑制する性質を持って長持ちする、錆を発生するけどボロボロにまでならない、長持ちする材料ということになります。実際は理論通りにうまくいく訳じゃなくて、錆の進行は遅いけども、やはり錆びてみっともないねという声はよく聞きます。そういうときは、フッ素系の樹脂で補正します。

これは東京都美術館の手すりです。歴史と民俗の博物館の手すりと同じです。この東京都美術館の手すりもトンビって言います。トンビの二代目です。このようにひとつの建物を造ったら、それを進化させて変えていくというのが、前川の建築のひとつの流れでもあります。



世界の近代建築から日本の近代建築へ ～自然の博物館の耐候性鋼の勾配屋根

三つ目が、1981年の自然の博物館です。床面積は2,983平米、鉄筋コンクリート造で地上2階建てです。先ほどもお話をいただいておりますが、埼玉県の大宮という土地柄の自然に関する資料を保管・展示



している施設です。

場所は上長瀬から5分ぐらいのところで、県立長瀬玉淀自然公園にあるので、高さ制限がありまして高さは13m以下。それから外観の形状は派手なものはいかん、色も派手なものはいかんという制約があります。その中で、この自然史博物館を作ったんですが、先程もご紹介がありました秩父鉄道の鑛物植物標本陳列所、自然科学博物館の後継としてこの博物館ができました。これは旧博物館の敷地ですが、博物館を設計するに当たって、この辺にあるメタセコイアをギリギリに残すという前提で、設計しています。

外壁は打込みタイルで、展示室の屋根は耐候性鋼の瓦棒屋根で出来ております。エントランスを入れてオリエンテーションルームから展示室を回遊して行く。1階はジオラマ、パレオパラドキシアの骨の化石がある。こちらの南側は事務棟で、事務と管理のバックヤードです。いわゆる化石処理室とか収蔵品が入っていて、2階が事務室という形になっております。

設計のイメージは、かつては海だった土地の力に学ぶというイメージ。僕は地の力という言葉で文章を書いたんですけども、いわゆる永久の流れを汲むこの大地に合った博物館として長持ちする建築でありたいということで、メタセコイアはひとつの歴史の証人として残そうということを考えました。さらに錆びにくい屋根に耐候性材を使って、平面計画も前川の一筆書きで計画。そして完成後の増築を予定して、北側に広場を造ったということになります。

耐候性鋼の屋根は、1番初めに1979年の福岡市美術館の4つのブロックの屋根に使っております。2番目に採用されたのがこの自然の博物館です。その後、1983年には弘前の斎場の勾配屋根で一部使っており、86年の国会図書館新館の屋根にも大きな勾配屋根で使っています。

これら以外は、勾配屋根は前川は使ってないんですね。それにはひとつのこだわりが実はありまして、近代建築というのはいわゆるインターナショナルスタイルということで、フラットルーフなんです。屋根に勾配をつけない。日本家屋風の日本趣味をもってやらないという前提で、「陸屋根」って書いて「ろくやね」って読みますけど、箱型なんです。前川はそれを1番初めの木村産業研究所の処女作でやったんだけど、雪の影響で、すが漏りをして、やむを得ず屋根をかけるんです。また、雪の影響でバルコニーが危険な状態になる。前川は西洋的な近代建築を日本に持ち込もうとして、津軽の雪で散々な目に遭うわけです。その後は、緩やかな勾配屋根は造ってるんですけど、明確な勾配屋根っていうのはなかなか造ってないんです。そこにはやはり、自ら近代建築家としてのこだわりがあった。そういうこだわりからやっと解放されたのが、埼玉県立博物館。自然の中で日本的な近代建築を日本流で見つけた時に、屋根から解放されていくわけですね。そして自然の博物館と



か、79年の福岡の美術館とか、晩年の作品に勾配屋根を造っていく。雨の多い日本の風土に根ざした建築の近代化を目指すことでやっと前川は、フラットルーフから勾配屋根に変わってきたということが言えると思います。

書院造りにみる前川建築との共通点

以上で、前川の建物3つを紹介しましたが、これらに共通して見えてくる前川建築の特徴を簡単に紹介します。

前川の建築手法のひとつとして、ボリュームを持ったユニットをつなげていく、重ねていくという手法があります。単位空間の増殖。その実例として学習院の図書館。埼玉会館。東京海上。重ね合ったところにコアを設ける。あるいは、雁行状につながっていく東京都美術館。

福岡の美術館はクラスター状につながっている。こういうこだわりが前川のプランには共通してあります。

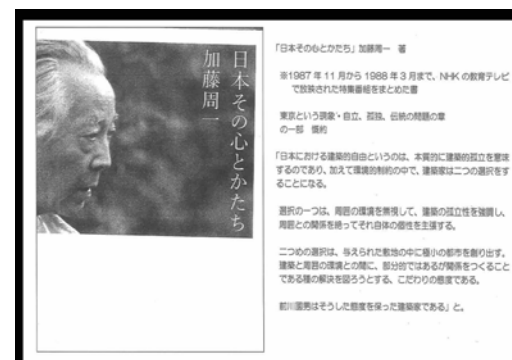
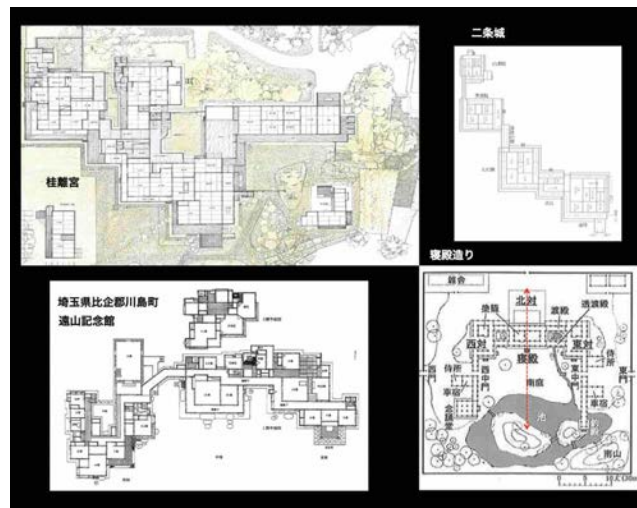
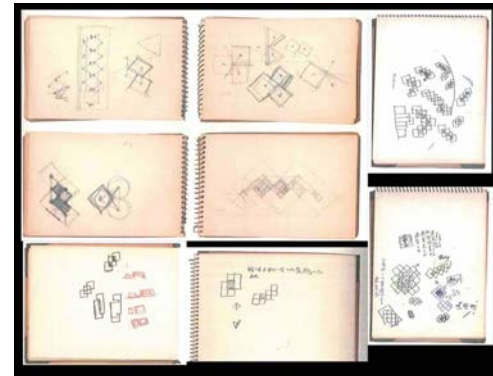
さらにこうした組み合わせから、人の流れ、佇まいが生まれ、一筆書きでたどっていくことができる。

これはご存じの書院造りの桂離宮なんですけども、前川の建築には書院造りの流れが入っている。書院というのは真っ正面から入らないわけね。隅から入って書院を回りながら、庭を眺めながら別書院を眺めていく。こういうプランを見ていると、前川のプランがこれにそっくりなんです。二条城も、単位空間の連続の構成ですね。

これに対して対照的なのが、平安時代に造られている寝殿造り。寝殿造りは平等院に見られるように左右対称で、寝殿を中心に左右に対屋が広がっていく。例えば、国立博物館とか、あるいは丹下さんの原爆ドームを軸にした平和記念資料館とか。モニュメンタリックな記念的なものなんですけど、前川のプランは書院造りの特徴があると思います。

前川國男は敷地と周辺とで環境を造る建築家

ちょっと難しい話になりますが、加藤周一さんという日本の知識人のひとは次のように述べています。「建築家には二種類の間がある。敷地の中で完結しようとする建築家と、敷地を解放して周辺と関係性を持っていこうとする建築家。前川はその後者である。



敷地との関係を周辺と環境を造っていこうとする建築家である」と言ってきました。前川の建築の特徴として、「建築の建つ立地を利用して周辺を通行人に開放する、あるいは休憩し立ち寄る広場を作る、あるいは建物内にレベルをつくって中庭を設ける。これは戦後、日本の近代建築におけるひとつの到達点であろう」という評価をしております。



前川はいわゆる都市計画をやってないんですが、そう言われてみると、東京文化会館のホールホワイエのレベル差、京都会館の中庭、東京都美術館の中庭などに、こうした特徴を見ることができます。さらには、人の集まり、あるいは紀伊国屋書店ビルの小さな広場とか、埼玉会館のエスプラナード、通り抜ける空間など、人との関わりを非常に大事にしているということが言えます。

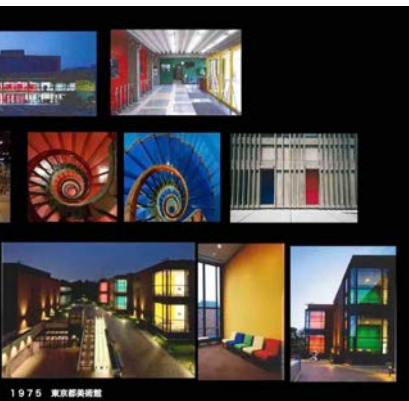
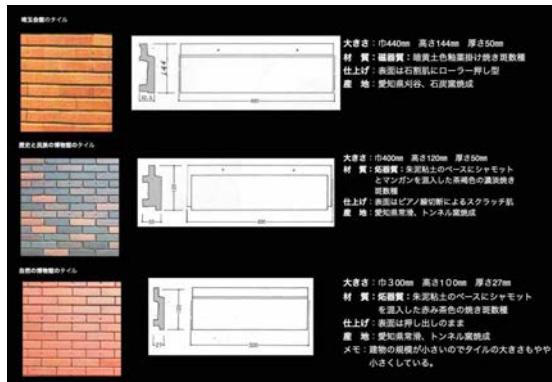
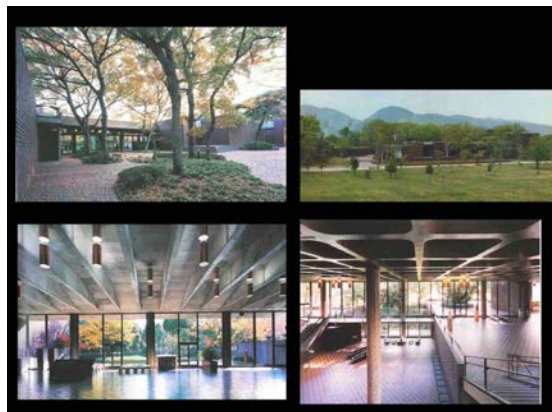
それから前川の建築の特徴としては、環境に馴染むということですね。これはもう言わずもがなです。

それから前川の建築の特徴としては、環境に馴染むということですね。これはもう言わずもがなです。

細部へのこだわりを見つけながら楽しめる前川建築

前川の建築は、いろんな素材を駆使したディテールがあります。手すりのトンビもそうですし、床のパターンもそうですね。熊本の県立劇場の床は鎖型、いわゆる吉原つなぎっていう日本の江戸時代の模様を使ってやっております。また木製の大きな手すりもよく見られますね。

それから、それぞれの建物に応じてタイルの形を変えているということもあります。埼玉会館の場合には、幅440mm、高さ140mm、厚さ50mmです。磁器質で黄土色、釉薬を掛けてます。歴史と民俗の博物館では朱泥。常滑で作って、幅400mmとちょっと小ぶりにしております。それから自然の博物館ではさらに小ぶりにして幅300mmと高さ100mm、厚さ27mm。これも朱泥で、やはり愛知県の常滑で作っておりますが、建物のボリュームによって、タイルのスケールを変えているということをやっております。



最後に前川カラー。これはもう皆さん、ご存知でしょうけど、色々な色を共通して使っています。

こういうデザイン・ボキャブラリーを前川の3つの建

築に当てはめてみたのが、皆さんのお手元の資料の最後の表です。まだまだ、他にあるかもしれません。

以上、本日は前川建築を通して、前川建築をさらに俯瞰するという壮大なテーマを設けてお話ししました。ひとつひとつ説明すると一日かかるんですが、お手元にある資料をじっくり見ていただくと、「あ、ここだね」「ここにもあるね」って、そういう発見が見つかると思うんですね。「こういうところも面白いよ」って、僕に言ってくれたりする人もたくさんいるんです。今日の皆さんもそういう発見をして、前川建築をより楽しんでいただければと思います。

以上で、お話を終わります。どうもありがとうございました。

前川建築「見どころ」その2		作成：前川建築設計事務所 橋本		
	埼玉会館（1966）	埼玉県立歴史と民俗の博物館（1971）	埼玉県立自然の博物館（1981）	
1.外観	打込ガレの構成	打込ガレの構成	打込ガレの構成	
2.平面構成手法	重なりと分散	社型プランの連続の配置	社型プランの連続の配置	
3.トア・コア・一筆描き (軸線・窓・広場)	トア・コア・一筆描き	トア・コア・一筆描き	トア・コア・一筆描き	
4.空間構成 ・小都市を創る ・レベル差のある広場	トア・コア・ロビー	吹き抜けとリフトゲート	吹き抜けとリフトゲート	
5.空間構成 ・特徴ある空間 ・環状に動線	大ホール（木の壁も）小ホール	開放的なエントランスロビー	開放的なエントランスロビー	
6.素材を活かした表現 (コブタ打放し)	粗々しいパラ板 繊細な小輪板	ジョイスト天井	ワッフル天井	
7.素材を活かした表現 (メイス・コブタ)	外壁コブタ			
8.素材を活かした表現 (積き物・タイル)	磁器質タイル	磁器質タイル	磁器質タイル	
9.素材を活かした表現 (床パターン)	網代張りや波板	網代張り		
10.素材を活かした表現 (サッシ)	網代張り	網代張り	網代張り	
11.階段手摺	網代張り	網代張り	網代張り	
12.照明	階段手摺 トンビ	トンビ	トンビ	
13.家具・什器	階段手摺 トンビ	トンビ	トンビ	
14.前川カラー	トンビ	トンビ	トンビ	

第3部 「トーク・彩発見」

橋本 功

池田 伸子

井上 素子

小澤 信子（進行：埼玉会館管理課）

歴史と民俗の博物館50周年、自然の博物館100周年、埼玉会館も2026年に100周年

小澤）池田さんの歴史と民俗の博物館が開館50周年、また井上さんの自然の博物館も100周年、ということでおめでとうございます。

先ほど裏で色々お話を伺っていたら、池田さんも井上さんもそれぞれの博物館で一番長く勤めていらっしゃるとのことでした。井上さんが学芸員になられた時に歴史と民俗の博物館で研修されていたということですが、池田さんとも一緒にお仕事をされていたのですか？

井上）採用されたときに、まずは修行を一番大きな博物館でということで配属していただきまして、池田さんと共に2年間ほど歴史と民俗、当時まだ県立博物館でしたよね。その時に勤めさせていただいております。

小澤）本日いろいろな写真をご覧になって、歴史と民俗の博物館の「ここは懐かしいなあ」という思い出の場所がありましたか？

井上）やっぱり一番初めに勤めた博物館であり、印象深いです。前川建築の博物館の重みみたいなものを感じました。事務所自体も外とつながっているような設計でしたし、やはり外と中のつながりを感じながら心地よい環境で仕事が出来、非常に幸せだなと思ってました。資料課におりましたので、建築関係者の方からよく写真の使用依頼を受けておりまして、その時に前川建築がいかにか皆さんから求められているものかということを実感いたしました。

小澤）歴史と民俗の博物館、自然の博物館に伺わせていただきましたが、凛とした佇まいや居心地の良さをとても感じました。

先ほど橋本所長からもお話しいただきましたが、前川建築の居心地の良さや開放感、前川國男の人の心に寄り添った哲学、そういったものが随所に反映されているのだなということをお大変感じました。

「ずっと変わらない平凡な素材で非凡を作る」という言葉をお伺いしましたが、両博物館も埼玉会館も、周りの環境に合わせて作られているということですね。

橋本）そうですね。

小澤）歴史と民俗の博物館と自然の博物館では、これから記念イベントがあるということですので、ご案内をお願いします。

池田) はい、先ほどお話しさせていただきましたように、建物が出来て埼玉県立博物館の時代から開館50年を迎えました。11月に開館致しましたので、今でちょうど50周年の記念ということで、展覧会は「埼玉考古50選」という50のテーマで、埼玉の考古に関するものをずらりと取りそろえた展示となっています。考古ファンの方、必見かなと。それ以外にも、映像などで博物館の50年の歩みを紹介するものをエントランス・ロビーの方で流していたり、あとちょっと年表などをご覧いただいたり、50年の歩みを皆さんにも知っていただく試みをやっております(註:2021年12月19日で終了)。

また、先ほど竹林のある季節展示室をご紹介しましたが、そこではちょうど特別展のポスター、先ほど今までに176の展覧会やったとお話ししましたが、特別展のポスターをご紹介して人気投票もやっております。ぜひお気に入りのものに1票を入れていただければと思います。

小澤) 皆様、ぜひ歴史と民俗の博物館に行ってください、人気投票にご参加いただければと思います。では、自然の博物館のご案内をお願いします。

井上) 自然の博物館の前身の博物館から100年目、県立の博物館になってから40年目ということで100年間に振り返る展示をさせていただきます。長瀬は遠くて足を運ぶのもなかなか大変かと思うんですが、これから一番いい時期になります。紅葉のシーズンで博物館の前の「月の石もみじ公園」というところでよく、NHKの中継で、ライトアップが紹介されるんです。

橋本所長が初めに博物館の設計前に来ていただいたのもこの秋ですし、紅葉シーズンはたくさんの方が来てくださいますので、展示と合わせて楽しんでいただければありがたいと思います。よろしくお願いします。

大きなガラス窓は、鳥にとっては危険物？

小澤) それではここで、橋本所長、池田さん、井上さんへのご質問がある方はいらっしゃいますか？

質問者1) 大変貴重というか、有意義なお話を皆様、ありがとうございました。歴史と民俗の博物館の池田さんにちょっと教えていただきたいんですが、大きいガラスがいっぱいあるんですけども、そこに黒い鳥の絵というようなものがあるんですけど、あれはトンビですか？

池田) はい。あれは、写真に出てきましたか？本当に大きなガラスが使われているために、あんまりいい話じゃないんですが、実はよく鳥がぶつかってきます。ですので、鳥よけなんですね。鳥よけのシールが貼ってあります。大宮公園の中や氷川神社の森が実はカラスのねぐらでして、都内へ行っていたカラスが通勤を終えて戻ってくる。本当に人間もカラスも都内へ通勤して戻ってくるんですけども、とにかくカラスが多い場所です。カラスに追われた鳥がぶつかったり、カラス自身がぶつかったりと、実は鳥が非常に多くぶつかってしまいうので、何かあるよと示すためのものなんです。効果もどのぐらいあるのか分からないんですが、たぶんトンビを意識したわけではないんです。

質問者1) 前川國男さんの設計に関わるものではない？

池田) ではないですね。

小澤) ありがとうございます。

鳥よけのシールにしても、やはり細やかな心遣いがあるのですね。居心地の良さは、そういったスタッフ皆様のご配慮もあってのことなのだなと今、あらためて感じました。

人間味を追求するとブルータルになる？

質問者2) 資料にも出てくる言葉ですが、あのブルータルなというカタカナの言葉の意味についてちょっと補足していただきたいんです。

この言葉が出てくるその前には、近現代建築のその上滑りなモノマネ主義的な瘦せた建築ではダメだということで、瘦せたという言葉に対してブルータルなど。何か筋骨隆々たるみたいなちょっとしたものすごい言葉だなという気がするんですけどね。前川建築はあの東京文化会館のその後の埼玉会館とか歴史と民俗の博物館なんかは、どっしり感があるんですね。東京海上なんかもそうですけど。その辺のところをブルータルと言ってるのかなとも思うんですが、ただブルータルというのは、現代アートなんかで何かやっつけ仕事みたいなのを並べて展示期間が終わったらすぐ産業廃棄物になるような、そういうイメージもあるんで。当時の前川氏がブルータルと言ったその時、どんな意味で使った言葉なのか、ぜひ説明してください。

橋本) 前川のコンクリートの打放しというのは、綺麗にしちゃイカンという話がひとつあります。あの1960年代はじめから、世田谷もそうなんですけども、当時の型枠というのはバラ板と言って、いわゆる土木なんかで使うサブロクの大きさにフレームを組んで、木端を横に並べていくという、そういうバラ板でもって型枠を作る。例えばこの埼玉会館では小ホールのホワイエの壁ですね。あれは尺パネルを少し細かくしてますけど、構成はバラ板。バラバラにした状態で荒々しく見せる。そういう印象をあえて作る。例えば1964年の弘前の市民会館。あれは外壁は全部バラ板のカラージュミみたいな感じで、いろんな組み合わせをつくっている。その粗さが素朴でいいんだと。

その後、世の中で型枠にベニヤ合板というものが使われるようになったんですが、サブロクの合板で型枠を作ると面が綺麗すぎる。要するに、コンクリートで手で練ってくっつけたような荒々しさみたいな感覚がなくなって、おとなしすぎて綺麗すぎちゃってどうもすかん、というようなイメージを前川は持っていたんですね。ですから、例えば東京都美術館では、わざとそれを全部削岩機で一回壊して荒々しく削り仕上げをするわけですね。手削りじゃ間に合わないの、削岩機で壊して荒々しくする。東京文化会館の小ホールの壁。あれは流政之さんという彫刻家の発想によるんですけども、その時に流さんが「一番下手な大工を連れて来い。中途半端に出来ているような造形をやりたいんだ」と言ったので、ああいう壁を作った。

ですからブルータルというニュアンスは、いみじくも今おっしゃったように、汚い廃棄物的なニュアンスというものも無きにしもあらずなんです。繊細な小端立ての小杉板の、いわゆる綺麗なフローリングのような型枠と比べると、ブルータルな荒々しい感じのコン

クリートの肌合いになるような、そういう型枠を作ることがもの凄く技術がいるんです。荒々しく見せる技術。荒々しいというのは乱暴という意味もあるけれども、あくまでも表情であって、施工は普通の型枠を作るよりも、もの凄く難しい。

言葉のひとつの考え方なんだけど、先ほどご指摘があったブルータルというニュアンスは粗末に扱うとかいう発想ではなくて、その荒々しさを表現する為のイメージとして、やや無骨なとか、綺麗じゃない、均整じゃない、端正じゃない、ハンサムではない、その荒々しさがひとつのデザインになっている。そういうニュアンスでブルータルという言葉が出てきたんじゃないかって僕は考えております。

発見が尽きない前川建築

小澤) ありがとうございます。

最後に、出演者の皆様から本日の感想を伺いたいと思います。

橋本) 今日は本当にこういう機会を頂きまして、ありがとうございます。埼玉会館で今回で8回目のセミナーなんで、もう語ることはないね、なんて話が出てた中で、ちょうどそれぞれ100周年、50周年を迎えるということでやろうと話が出てきた時にはさて、さて、時間的にどうなるのか、二日欲しいねみたいな感覚もあったんだけど、幸いなことに今度の11月3日にも歴史と民俗の博物館で、博物館に特化してちょっと膨らましてお話をします。逆に、井上さんの方からも自然の博物館の原稿を書いたり、それから色々アドバイスをもらったり、今日は思いがけなく、僕の若かりし頃の写真が見れて非常に良かったなと思います。

これからもこの埼玉にある、前川が心を込めて、かつ前川の建築の中でも時代が大きく変わっていくひとつの役目を果たしているこの3つの建物。これが皆さんに愛されて、私はこう思うという発見をどんどんして、好まれていくことを非常に心待ちにしております。今日は本当に皆さんに会えてよかったです。どうもありがとうございました。

台車がガタつく床だから、ものを大事に運ぶことを教えてくれる前川建築

池田) 本日はどうもありがとうございました。私も、橋本所長の話、井上さんのお話を聞きまして、改めて私の勤める博物館の建築物が、単なる展示室や資料の入れ物ではなく、それ自体、誇れる芸術作品であるということ、そういうところに勤めていられることを改めて大変誇りに思った次第です。

こういった名のある建築家の建造物、博物館や美術館はだいたい全国各地にあります。学芸員同士で話をしていると、正直申しまして、使い勝手が便利かという必ずしもそうばかりではない。前川建築も例えば、レンガの床というのはスーッと台車を押して資料をガタガタさせずに動かせるわけではなく、細心の注意を払いながらいつも運んでおります。決して学芸員を甘やかしてくれる建物ではないのですけれども、それを補って余りある魅力があります。逆にこれがリノリウムのつるつるの床だったら楽だったかもしれませんが、その代わり資料に気を使うことなく何気なく運んでいたかもしれませんし、いろんな意味で、完璧で便利で楽な建物ってないでしょうし、ちょっと私たちを鍛えてくれる建物であり、誇りを持たせてくれる建物だなというふうに、思いを新たにいたしました。

また当館で、11月3日に実は橋本所長に博物館の話について、今度はガッツリともっとお話をいただく予定でございます。ぜひお申込みいただきましてご来館いただけたらと思っております。どうぞよろしく申し上げます。今日はありがとうございました。

周りの自然と共に誰でも楽しめる博物館へと成長を続ける前川建築

井上) 本日はありがとうございました。私、もともと前川建築が素人ながらに好きで、ふたつの博物館に勤められたということは本当に幸せだと思ってたんですが、今日、所長のお話、それから池田さんのお話をお聞きしまして、まだまだ知らない前川建築の、そこに込められた思いや価値があるということを実感いたしました。今回、展示で取り上げて何より良かったのは、私を含め職員自身が前川建築の価値に改めて気づいたということです。

私は皆さんに、長瀬に来てくださいと言いましたが、来たらちょっとビックリされてしまうかもしれません。所長が博物館に久しぶりに来てくださるって言ったときも、ちょっと私、心が引けまして、がっかりされるんじゃないかなと思ってたんですけども。何故かという、橋本所長は「博物館は生き物だからいいんだよ」と言ってくださったんですが、当館が出来た時は学術的なコンセプトを重視した美術館のような自然史博物館だったんですね。最近、本当にちっちゃいお子さんの家族連れが多くなりました。我々もたくさんの方に親しんでいただきたいので、わかりやすい展示、楽しんでいただける、そして観光とともに学習をちょっとしていただく、そのような博物館を目指しております。展示スペースが増築されなかったがために非常に手狭なので、あのドンキホーテのような圧縮展示にもなっております。その辺のところも見にきていただければと思います。そして今日お話を聞きまして、10年後に50周年展ができるなと思いましたので、10年後、ぜひ橋本所長、お話をしに来ていただければと思いました。どうも今日はありがとうございました。

小澤) 前川建築が埼玉県に三つあるということを誇りに、これからも大事に皆様に居心地の良い空間を提供できるように頑張って参りたいと思いますので、引き続きよろしく願いいたします。それでは改めまして、橋本様、池田様、井上様、本日は大変貴重なお話をどうもありがとうございました。

*本文及び写真資料等の無断使用はご遠慮ください。

主催：(公財) 埼玉県芸術文化振興財団